九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

粟末靺鞨の對外關係（その二）：靺鞨七部考第三章

日野，開三郎

https://doi.org/10.15017/2339035

出版情報：史淵. 42, pp.1-77, 1949-12-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

粟末靺鞨の對外關係（その二）

―靺鞨七部考第三章―

日野開三郎

目次

第一章　七部の住域（三六・三七合輯號）
第二章　七部の前身とその屬種（三八・三九合輯號）
第三章　粟末靺鞨の對外關係
　第一節　西方遊牧民族との關係
　　第一項　突厥との關係
　　第二項　薛延陀との關係（以上四一輯）
　　第三項　契丹との關係（附　霫）
　　參　考　弱小民族の兩屬
　第二節　高句麗との關係
　　第一項　隋代に於ける關係

粟末靺鞨の對外關係
第二項　唐代に於ける關係
第三節　中國との關係
第一項　隋との關係（以上本輯）
第二項　粟末靺鞨人突地稽一黨の隋唐への歸屬
第三項　唐との關係
第四節　室韋及び靺鞨他部族との關係
附　說　總章元年唐將薛仁貴の攻陷せる扶餘城

第三項　契丹との關係（附、靄）

隋・唐初に於いて塞外の覇權を握つてゐたのは突厥↓薛延陀等の土耳古系勢力であり、從つて靺鞨の西隣に住む遊牧民族を支配したのは突厥帝國及び此に代つた薛延陀であつた。舊唐書卷一九九靺鞨傳に

東至於海、西接突厥、

とある突厥は住民としての突厥族を指すものでは無く、突厥帝國の謂である。住民として西隣に接して居たのは契丹と靄とである。そして此の兩族中、特に靺鞨と交渉の深かつたのは契丹で、靄と靺鞨との關係を傳へた史料は殆んどない。

契丹族は蒙古種を根幹として通古斯種の血を混じたものと云はれ、通古斯種を根幹として蒙古種を交へたと云はれる濊貊族（高句麗・夫餘・沃沮・東濊等。尙先章に論考した如く粟末靺鞨は夫餘族の、白山靺鞨は沃沮族の裔である）と血脈的には相通ずるものがあるが、後者の獵農生活とは全く異る遊牧畋獵生活を送り、その生活形態は全く蒙古的であつた。初めて史上に姿を現したのは古く後魏の時で、その後ち或は蠕蠕↓突厥↓薛延陀↓復興突厥↓回紇等相次いで漠北の覇權を握つた强大勢力に西北より抑へられ、或は後魏↓隋↓唐等の大國に南より制せられ、時には又高句麗・渤海等より東からも壓迫せられ、此等諸强國の間に或は交々依附し、或は兩屬して自存の策に辛苦し、時に手痛い打擊を被つたこともあり、前後數百年の久しきにわたつて容易に獨立し得ざる不幸な境地に置かれて居た。然しそれにも拘らず、唐末五代の世に至つてかかる四面からの壓迫が弛むや、忽ち此の好機を捉へて大發展を遂げ、北宋末に至る約二百年間、東洋無

双を誇る大帝國を築き上げた。即ち彼等は長年に亙つて受けた壓迫侵害にも拘らず、よくその民族的活力を保持してゐたのであつて、特にその慓悍勇武は彼等をして群小民族中でも一段强力な勢力たらしめて居た。その住地は彼等が遊牧民族たりしと、四面より夫々受けた壓迫とによつて屢々遷り變つたが、大體より云へば西喇木倫河盂の地に居り、隋唐時代に於いては、或は託紇眞水（土護眞水＝今の老哈河）流域に據り、或は白狼水（今の大凌河）邊の要衝で隋唐の東北控制の據點となつてゐた營州の北方に遷り住み、已述の如く、或は隋唐に歸し、或は突厥↓薛延陀に從ひ、時に又兩屬して保身をはかつて居た。されば當時の契丹の對外活動は契丹自身の意志、自身の利害以外に、その宗主國の力に動かされてゐる場合が多かつた。一方、當時の靺鞨も突厥↓薛延陀や高句麗等の强國に壓服せられてゐたので、その對外活動には宗主國の力が强く作用してゐる場合が多く、かくて契丹と靺鞨との關係はその背後に在る强大國の動きをも反映した複雜なものとなつて居た。

西喇木倫の南を本據とする契丹に對し、北を本據として居たのは霫で、彼等は北方烏羅護室韋に連り、從つて最も長大な面を以て靺鞨に接して居た。このことは舊唐書卷一九九霫傳に

霫。中略。居于潢水西喇木倫北、亦鮮卑之故地。其國在京師東北五千里。東接靺鞨。西至突厥。南至契丹。北與烏羅護接。

とあり、通典卷二〇〇北狄傳、霫の條に

霫。中略。隋時通焉。與靺鞨爲隣。理黃水之北。

とあるに依つて明かである。所で、滿洲學報第四所載、島田好氏「奚・霫・白霫民族考」に依れば、貞觀中に薛延陀が興つて突厥を破つた時、霫は唐に依附して潢水の南に徙り、やがて奚の間に沒入して終つたとのことである。新唐書卷二一八契丹傳に

東距高麗。西奚。南營州。北室韋・靺鞨。

とて契丹四周の民族を擧げた中に、霫の名が見えてゐないのは、それが潢南に徙り奚中に沒し去つた後ちの狀態を傳へたからであらう。所で霫の南遷後、潢南に本據を置く契丹の北隣の民族として室韋が擧げられてゐるのは、霫の故地に他の民族の移入する者なく、潢水より遼北の洮兒河に至る廣濶な地域が殆んど無主狀態となつて契丹の勢力下に屬して居たことを示すものである。

潢北時代の霫が接して居た東方の靺鞨とは、伊通・東遼二水方面の粟末靺鞨と伯咄靺鞨とでなければならぬ。又霫が南遷し、その故地が契丹の勢力下に入つた結果として新に契丹が直接隣接するに至つた靺鞨も同じ粟末部と伯咄部とであつたわけである。上掲新唐書の契丹傳にその北隣の住民として擧げてゐる靺鞨は當然此の伯咄・粟末と解す可きであるから、此を北とせる方位は精確で無く、北東とす可きである。次に舊唐書卷一九九契丹傳を檢するに同じ四境を

東與高麗隣。西與奚國接。南至營州。北至室韋。

と記し、靺鞨人との接觸に言及してゐない。然も霫族の名も擧げてゐないのであるから、霫族が南下して後ちの狀態を傳へたものであることは紛れない。而して霫族南遷後の契丹・靺鞨の接住も紛れない史實である

から、此所に靺鞨を擧げてゐないのは、史筆の疎漏か、それとも何らかの意味を含んでゐるのか、檢討を必要とする。後述する如く、高句麗は貞觀十年頃に於いて伊通河方面の粟末靺鞨を臣服せしめ、更に伯咄・安車骨部等をも羈縻して終つてゐるから、上掲舊唐書の契丹傳がその北隣の靺鞨族を擧げてゐないのは、單なる疎漏では無く、その記述の年代が貞觀十年頃以後であつた爲め、靺鞨を高句麗中に含ませて終つたのかも知れない。

潢北に本據を置き、廣く靺鞨と接して居た時代（唐の貞觀の初め以前）の霫は、靺鞨、特に伊通・東遼二水方面の粟末靺鞨及び伯咄靺鞨と密接な關係があつた筈である。殊に此の靺鞨兩部と霫とは共に突厥↓薛延陀の東面統轄の設に屬し、已述の如く、時には共に從軍してゐるのであるから、相互に相當深い交渉があつたと見て誤りあるまい。所が實際は兩族の關係や交渉の有無を傳へた史料は殆んど傳へられて居ない。此は霫が奚・契丹を距てて支那に對してゐたこと、その勢力が微弱で支那の邊患をなす程の力を有してゐなかつたこと等の爲に、支那人との交渉は少く、關心を惹くことも薄く、支那人に記錄せられて後世に殘る機會が乏しかつた爲めであらう。靺鞨と接住せる遊牧民族で相互の關係を最も多く傳へられて居るのは、支那の邊外に接住して慓悍な武力を振ひ絕えず邊患をなしつつあつた契丹である。

先づ隋書に就いて見るに、その卷八四・靺鞨傳に

其國（靺鞨）西北與契丹相接。每相劫掠。後因其使來。高祖誡之曰。我憐念契丹與爾無異。宜各守土境。豈不安樂。（中略）使者謝罪。高祖因厚勞之。令宴飲於前。使者與其徒皆起舞。其曲折多戰鬪之容。上顧謂侍臣

曰。天地間乃有此物。常作用兵意。何甚也。

の一節がある。その云ふ所は

(1) 靺鞨は好戰勇武の民で、毎に契丹と相劫掠して居たこと

(2) 高祖文帝の時その使者が來獻したこと

の二點である。此の相劫掠して居たと云ふ靺鞨は當然契丹に接して居た粟末部人でなければならぬ。又使臣來朝の時期はおそくも開皇十三年頃以前と推定せられる。それは後述する如く、隋代の諸文獻を渉獵するに、靺鞨の入隋はすべて此の年以前に限られ、以後は全く絶えてゐるからである。從つて此の相劫掠も隋初のことでなければならぬ。所で此の入隋靺鞨は契丹と相劫掠して居た者自身かと云ふに、さうは見難いのである。

靺鞨の隋への朝貢路は、已述の如く、當時の扶餘（今の農安）より西南行し、シラムレンを渡り、契丹の住地の西境を通つて營州に入る路線であつた。新城（撫順）遼東城方面經由の入貢は高句麗に遮斷せられて居たのである。されば契丹と相仇敵視せる靺鞨は全く入貢の道が無かつたわけで、隋初に入貢した靺鞨も契丹とは相劫掠せず、寧ろ相往來通好して契丹の住域を安全に通過し得て居た者と見なければならぬ。又高句麗は靺鞨の支那への朝貢を最も忌み嫌つてゐたのであるから、此を敢てした靺鞨は高句麗の支配の及び難かつた地、即ち高句麗より離れた所の者に相違無く、當時の靺鞨の貢路の起點が農安であつた事實と睨み合はすに、それは農安方面の粟末靺鞨であつたと推測せられる。尙此の推測は後文に於いて確證する筈である。

要するに、上掲記事の入隋靺鞨は伊通河流域の粟末部人で、彼等は契丹との相劫掠を事としてゐたのでは無く、寧ろ親和し、その地域を通り拔けて支那に往來していたのである。當時、伊通河方面の粟末部人と契丹人との間には霫族が介在し、從つて兩者の衝突攻爭の機會も殆んど無かつたと想はれる。而して入貢の粟末部人は霫族の地をも通過したのであるから、契丹のみならず、霫族とも親和してゐたと見る可きである。勿論、時に劫掠し合つたこともあつたかも知れないが、それは未開族の間に有り勝ちな掠奪欲の一時的な衝動に驅られた程度のもので、決して相劫掠が兩者の基本的な拔き差しならぬ關係であつたと斷ずることは出來ないのである。然らば契丹と劫掠してゐたと云ふ靺鞨とはどの方面の者か。

當時の契丹の本據はシラムレン河の南で、その東北の扶餘方面の靺鞨は契丹と相劫掠するを事としてゐなかつたのであるから、相劫掠地はそれより南、即ち遼河流域の方面に求めなければならぬ。先掲記事に「靺鞨國西北與契丹相接、每相劫掠」とて契丹を靺鞨の西北としてゐるのは、その相劫掠の地を遼河流域と見て初めて成立し得る相互の方位關係である。即ち契丹は遼河の流域から西北方に當る。所で遼河流域は靺鞨の本土では無く、高句麗の直轄領土であつた。從つて此の相劫掠は高句麗管下の靺鞨と契丹人との關係であつたと思はれる。高句麗に早くから服屬し、遼河方面に於いて高句麗に協力し契丹とも攻爭して居た靺鞨人は主として輝發河流域や吉林・烏拉を中心とする松花江流域の粟末部人であつた。彼等の對契丹活動に就いては後文に逐次詳述するが、その契丹攻擊は常に高句麗の意を體したもので、從つてその契丹との攻爭を考察するには、先づ高句麗と契丹との關係より述べておく必要がある。要するに、契丹と相劫掠せる靺鞨人は主

として輝發河方面等を原住地とする高句麗配下の粟末部人であり、隋に入朝した粟末部人は高句麗の制壓外に在つたと思はれる伊通河方面の者で、明かにその集團を別にし、且つ契丹とは寧ろ親和を基本的な關係としてゐたのである。それを隋の文帝が彼是混同して入隋の靺鞨人に契丹との相劫掠を誡めてゐるのは、かうした複雜な實相に對する認識が足りなかつた爲めであらう。又「靺鞨國西北與契丹相接。每相劫掠」とて靺鞨國の西北に契丹ありとし、一見靺鞨の本土が契丹の東南に當つてゐたるかの如き記述をなしてゐるが、現實の問題として靺鞨の本土は契丹の東南に非ずして明に東北であつたのであるから、此れ亦不精確な記述と云はねばならぬ。而して此の不精確な方位關係の記述は、たまたま契丹と靺鞨との相劫掠地が契丹の東南なる遼河流域であつた所から輕々に下された隋人の推斷に出たものであらう。現實の本土は契丹の東北に當つてゐた靺鞨を東南の如く記している上掲記事の由來はかく解するの外なく、又かく解する時は此の記事の方位に關する部分の全く信用に値せざることが明かとなり、從つて「西北」なる一句を眞劍に考へて解釋を得ず、結局「西南」の誤りならんなどと原典の文字を勝手に改竄する必要もなくなる。

契丹と高句麗との關係は頗る古い。そして史上に初めて傳へられてゐる兩者の交渉は攻爭である。即ち後魏の太和三年（四七九）高句麗の長壽王は當時遊牧民族の間に雄視してゐた蠕蠕と結んで契丹を壓し、爲めに契丹の部落萬餘口は逃れて白狼水に至り、後魏の保護を求めてゐる。所が彼等は北齊の世に入りその邊境を寇掠した爲め、天保四年（五三）その討伐を受けて大敗し、更に此の頃崛起した突厥にも壓迫せられ、南北に敵を受けてその萬餘戸は高句麗に賴つてゐる。此の高句麗への臣屬は引續いて隋初に及んだ。但しかか

る依遼轉附は契丹がその全部族をあげて行を共にしたものではなく、行動を異にした別派の者も居た。然しとにかく隋初には尙高句麗の勢力は强く契丹に及んでゐたのである。而して南北朝の末頃からは突厥の勃興があり、その壓力は契丹にも强く加へられ、爲めに契丹は突厥にも臣屬せざるを得なかつた。所が開皇三年には新興隋國の突厥經略による突厥の東西二分があり、此の隋朝の優勢は南方より契丹を壓し、契丹の一部をして隋に歸附せしめることとなつた。かくて隋初には契丹は突厥・高句麗・隋の三大國に壓せられ、それ等の間に分屬するの狀態に在つた。隋書の契丹傳に

開皇四年率諸莫賀弗來謁。五年。悉其衆欵塞。高祖納之。中略。其後契丹別部出伏等背高麗率衆內附。

冊府元龜卷九七九・外臣部・降附門、繫開皇六年

高祖納之。安置於渴奚那頡之北。開皇末。其別部四千餘家背突厥來降。

とあるは、隋朝建國前後に於ける契丹の分屬狀態を要領よく傳へた記事である。此によると、當時の契丹は、(イ)突厥に臣事せる者、(ロ)高句麗に附せる者、(ハ)隋に歸せる者等に分れ、南北朝末隋初には强盛を誇れる突厥に臣事せる者最も多くしてその主力を占め、高句麗に附せる者此に次いでゐたのが、開皇三年に於ける隋の突厥擊破によつてそれ迄突厥・高句麗に附してゐた者は續々隋に轉屬したのである。但し突厥は尙强力に存續してゐたので、此の來屬も擧族的專屬ではなかつた。右記事の續きに

上方與突厥和好。重(ハバカリ)失二遠人之心。一悉令給糧還本。勅突厥撫納之。固辭不去。部落漸衆。遂北徙逐水草。當遼西北二百里。依託紇眞水而居。

とある如く隋側でも未だ突厥に多少の氣兼ねをしてゐた程で、契丹としては兩屬保身の立場を取らざるを得

なかつたのである。かく契丹は隋・突厥・高句麗の三大國に挾まれてその間に依違し、時の最優勢勢力に靡いて自存の道を講じて居たのであるから、南北朝末隋初の契丹の主力は、當時の最強國突厥に歸してゐたと見る可きであり、事實突厥が契丹の主力を服屬せしめ、奚・霫・靺鞨等と共に此を東方統轄の設に入れてゐたこと、既述の如くである。所で隋書卷三九陰壽傳に

時有高寶寧者。齊氏之疎屬也。爲人桀黠有籌算。在齊久鎭黃龍營州。及齊滅。周武帝拜爲營州刺史。甚得華夷之心。高祖爲丞相。遂連結契丹・靺鞨舉兵反。高祖以中原多故未遑進討。以書喩之而不得。開皇初又引突厥攻圍北平。

とて營州に據り周→隋に反抗した高寶寧なる者が、或は契丹・靺鞨を援き、或は突厥を引いて侵寇したとある。營州邊外の契丹は突厥管下の者に相違なく、此と行動を共にした靺鞨も同じく突厥管下の者に違ひないから、伊通河方面の粟末靺鞨と見る可きであらう。彼等は突厥と周→隋との對抗に突厥の先棒を擔いで高寶寧を援け以て周に寇したのであらう。即ち伊通河方面の粟末靺鞨は契丹と行動を共にして遠く周の邊外に寇したのであつて、此の共同作戰も亦彼等の和親を親ふ一の參考となる。勿論、此の契丹と靺鞨との北周への入寇は彼等自身の意志と云ふよりも突厥の意を酌んだものと見る可きである。尙後述する如く、伊通河流域の粟末靺鞨は北齊と隋とには屢々入貢し乍ら北周には朝貢してゐないが、それは右の如く突厥の意嚮に從つて對立侵寇してゐたからである。

開皇六年の出伏等の高句麗離脫に示される如く、契丹は高句麗を去つて新興の隋や突厥に轉附して行つ

た。此の離脱を高句麗が喜ばなかつたことは當然で、必ずや何らかの處置を講じたものと思はれる。冊府元龜卷九九六外臣部・責讓門に高祖より高句麗王に與へた責讓文を載せてゐるが、その一節に

乃驅迫靺鞨。固禁契丹。

とある。冊府元龜は此を開皇十七年に繫け、その他の諸史も此の記事を引けるものは悉く同じ年に繫けてゐるが、後文に考證する如く、此の繫年は明かに誤りで、十年頃と推測せられ、固禁の事實はそれ以前と解せられるのである。因つて思ふに、此の固禁とは、夫の出伏等が高句麗を去つた時、此を妨げんとした高句麗がその一部のものを拘禁したことを指してゐるのであらう。新唐書卷一一〇泉男生（蓋蘇文の子）傳に彼が國内城を以て唐に降つた時の事を記して

男生。中略。率其衆與契丹・靺鞨兵内附。

とあり、その配下に契丹兵の居たことが知られるが、此の契丹兵の中には先に拘禁せられた者の子孫が混つてゐるものと想はれる。かくて高句麗の意に反して離れ去つた契丹が高句麗と親睦したとは考へ難く、寧ろ高句麗の敵視を受けたであらう。殊に高句麗と對立せる隋に歸依して後ちの契丹は高句麗と對立す可き運命に置かれたものと見なければならぬ。

隋の支那一統以後、その鋭鋒の己に向けられんことを懼れた高句麗は頻りに西境の邊防を固め、隋との衝突に備へつつあつたが、開皇十八年に至つて遂に戰端を開くこととなつた。而して此の戰端開始は、資治通鑑卷一七八隋紀・開皇十八年二月の條に

高麗王元。帥靺鞨之衆萬餘寇遼西。營州總管韋冲擊走之。上聞而大怒。

とあるに依れば、高句麗の先制攻擊に因り、然も此の攻擊には靺鞨軍が重要な役割を演じてゐたのである。此の靺鞨の主體が粟末部であつたことは、戰場が遼河流域であつた點から容易に推察せられる。但し「靺鞨之衆萬餘」は恐らく靺鞨の精鋭を先鋒とした此の時の高句麗國の全兵力であらう。高句麗國軍が常に靺鞨兵を先鋒としてゐたことは後文に詳說する豫定である。

是より先、開皇三年、突厥が隋に伐たれて東西に分裂し、一時勢力の萎縮を來すと、高句麗はそれに乘じて伊通河流域を占領し、此の方面の粟末靺鞨をも從へた。此の時高句麗の侵入に反抗した巨帥突地稽等の一黨千餘戸は遂はれて隋に來歸し、營州近傍の地に住みついてゐた。此のことに就いては後文に專攻するが、先掲責讓文に「固禁契丹」と並べて「驅迫靺鞨」とあるは突地稽等の亡命を指す。從つて隋と衝突した開皇十八年當時には全粟末靺鞨が高句麗に臣屬してゐたわけである。かくて嘗て契丹と共に突厥に隷してゐた伊通河方面の粟末部は此より別の主權に分れ屬したのであるが、開皇十八年の戰に彼等が從征して居たか否かは明かでない。所で此の戰のことを述べた隋書卷四七韋冲傳には

尋拜營州總管。冲容貌都雅寛厚得衆心。懷撫靺鞨・契丹。皆能致其死力。奚・霫畏懼。朝貢相續。高麗嘗入寇。冲率兵擊走之。

とあり、[註22]入寇の高句麗を擊退した營州總管韋冲が奚・霫・契丹・靺鞨をよく懷撫して居たことを傳へてゐる。勿論、此は主として入貢貿易の徒をよく撫服してゐたことを指してゐるのであらうが、此等諸族の中で

營州に接して住んで居た契丹人の一部や、夫の亡命來附せる突地稽一派の靺鞨人は必ずや彼に從軍したであらう。尙突地稽等のことは後文に詳述する。高句麗の先制攻擊に端を發した文帝の遠征は水潦の爲めに失敗し、高句麗も亦陳謝の意を表明したので、兵を收め、兩國の攻爭は一時緩舒せられることとなつた。

所が文帝に嗣いで煬帝が立つと兩者の關係は再び破裂し、帝は大業七年より十年に至る間（但し七年は準備、八年より出兵）、兵を遼東に送つて激戰を交へた。此の遠征が全く失敗し、それが大隋帝國の命取りとなつたことは周知の如くである。此の大激戰に於いて靺鞨兵特に粟末靺鞨が高句麗軍の一大構成要素として目覺しい活躍を爲したことは後文に詳述する如くである。一方百餘萬と云はれた隋軍の中には、先に亡命して營州附近に居た突地稽一黨の粟末靺鞨も從征してゐた。但し此れ亦後述する。營州の北に住み隋に歸屬してゐた契丹の中にも必ずや從征せる者が居たことと推測せられるが、此を確證する史料は索められない。

隋末唐初の大亂が突厥の勢力恢復に好機を與へ、その全盛時代を築かしめたこと、それが爲め契丹は中國を離れて突厥に歸したこと、隋初高句麗に從へられた伊通河流域の粟末靺鞨も再び突厥に歸したこと等は先に述べた如くである。新唐書の契丹傳に

武德初數抄邊境。二年入寇幷州。

とある如く、突厥を後援とせる彼等は頻りに唐の北邊に寇して居た。然し唐の國威が張るに連れて次第に唐に靡いて來た。右文の續きに

六年（武德）其君長咄羅遣使貢名馬豊貂。貞觀二年。其君長摩會率其部落來降。

とあり、唐會要卷九六契丹の條に

又契丹有別部酋帥孫敖曹者。武德四年。與靺鞨酋長突地稽俱請內附。詔令營州城傍安置。

とある如く續々その來降を見た。然し此等は契丹の一部派で主力では無かつた。主力は突厥→薛延陀と唐との間に立ち、兩者の勢力の上下に從つて或は依違し或は兩屬してゐたのであつて、此の主力の唐への來附專屬は、已述の如く、薛延陀の潰滅した後ちたる貞觀二十二年であつた。

さて隋の大遠征軍を却け隋朝を崩滅せしめた高句麗は愈々自國の力を過信し、唐に對しても往々侮蔑の言動を示してゐた。唐が此を快しとしなかつたことは勿論であるが、突厥→薛延陀の大敵を北に控へてゐたので、兩面構敵の愚を避け、しばらく隱忍自重してゐた。唐が遂に征麗の戰を決行したのは貞觀十八年で、その二年後には薛延陀を討滅したので、爾後專心高句麗經略に從ふを得た。然し第一回の遠征が高句麗の手强い抵抗に阻まれ速戰速決の不可能なるを知つた太宗は、絕えずその彊場を擾亂して防戰に奔命する高句麗の疲勞を俟つ戰略を採つた。[註23] それが爲め、當時としては珍しい長期戰となり、とにかく此の策略が奏効して高句麗を滅し得た總章元年（六六八）迄には實に二十五年の歲月を要し、その時太宗は已に世を去つて高宗の時代であつた。但し此の間常に出兵し戰ひ續けてゐたわけではなく、間歇的に遠征を繰返へしてゐたのである。此の長年の間に屢々交へられた激戰に於いて、靺鞨は高句麗軍中の精銳として勇戰奮鬪を續け、唐軍の最も恐れる所となつてゐた。そして此の唐と戰つた靺鞨は主として粟末靺鞨であつた。又隋末、突厥に歸屬してゐた伊通河方面の粟末靺鞨も、突厥が唐と薛延陀との挾擊に敗れて衰へた爲め、再び高句麗の占領する

所となり、大體貞觀十年頃より高句麗に臣屬し、對唐戰にも從軍して大いに活躍した。但し此の粟末靺鞨の高句麗への臣從協力に就いては次節に更めて專考する。

靺鞨、特に粟末部人の高句麗への協力に對し、契丹は常に唐軍に味方して戰つた。資治通鑑卷一九七唐紀・貞觀十七年六月の條に

上曰。蓋蘇文弑其君而專國政。誠不可忍。以今日兵力取之不難。但不欲勞百姓。吾欲且使契丹靺鞨擾之。何如。

とある如く、太宗は高句麗征伐を決行する以前より契丹・靺鞨の兵力を計算に入れ、同卷・十八年七月甲午の條に

下詔。遣營州都督張儉等。帥幽・營二都督兵及奚・契丹・靺鞨。先擊遼東以觀其勢。

とある如く愈々第一回の遠征を決行するや、彼等を幽・營二州の唐兵と共に先鋒とした。尙右の靺鞨とはその本土に在る者では無く、先に一言した突地稽等の內屬者であり、契丹も同樣に內屬して突地稽等と共に營州の近傍に住して居た孫敖曹等の親唐一派で、主力では無かつたと解せられる。爾來此の契丹兵が先鋒として活躍したことは、同卷・同年十二月甲寅の條に

詔諸軍及新羅・百濟・奚・契丹。分道擊高麗。

とあり、翌十九年四月の條に

營州都督張儉將胡兵爲前鋒。進渡遼水趨建安城。破高麗兵斬首數千級。

とあるに依つて明かである。一方高句麗も、冊府元龜卷一一七帝王部・親征門・貞觀十九年六月の條の太宗の言に

高麗常令靺鞨居前。

とある如く、[註四]常に靺鞨（粟末部）を先鋒としてゐた。從つて唐と高句麗との攻爭は契丹と靺鞨との先鋒戰に開始せられたわけである。又唐軍中に一部の歸化靺鞨人の居たのに對し、高句麗側にも一團の來屬契丹人が居た樣である。先揭新唐書卷一一〇泉男生傳に彼が國內城を以て唐軍に降つた時のことを記し

男生。中略。率其衆與契丹・靺鞨兵內附。

とあるはその證據である。

さて、第一回の交戰に於いて唐軍に從征した契丹兵はその主力でなかつたが、薛延陀の滅亡を機として、貞觀二十二年十一月、窟哥を總帥とする契丹の主力が唐に專屬するに及び、契丹はその主力を擧げて唐に味方することとなり、それ丈唐の遼東攻勢は有利となつたが、逆に高句麗は頗る不利となつた。たまたま、翌二十三年三月、太宗崩じて高宗立ち、唐の遼東征伐は一時停頓の形となつた。永徽三年正月、高句麗は使臣を入唐せしめ、高宗の新方針を窺はしめたが、[註五]高宗に父帝の遺策繼承の意あるを察し、永徽五年、遂に先制攻擊を敢行した。第二回の交戰である。而してその鋒先は、冊府元龜卷九九五外臣部・交侵・同年十月の條に

高麗遣其將安固率高麗・靺鞨兵侵契丹。松漠都督屈哥發騎兵禦之。戰于新城。適會大風。高麗放箭風吹並廻。因而陳亂。契丹乘之斬首五百級護馬七百餘疋。高麗敗走。草乾風勁。契丹又縱火迫之。飈焰飛

起。燒殺人馬甚衆。

とある如く、[註25]新城方面に向けられ、そこで總帥窟哥の率ゆる契丹の主力に邀擊せられ、却つて大敗した。此の時にも靺鞨軍が參加して契丹と戰つたのである。新城に就いては兩說あり、その一は今の撫順の地に比定せられる新城と今の新民縣の東北なる遼濱塔に比定せられる遼東新城との二つありとするもので、[註27]他は今の撫順に比定せられるもの以外に新城と稱する所無く、遼濱塔の地を新城と呼びたりと云ふ現存の史傳は、後人机上の造作に出で、當時の實在名に非ずとする說である。[註29]此の兩說中、筆者は前說を是と信じ、從つて高句麗・靺鞨の軍が契丹と戰つたと云ふ新城は遼東新城、即ち遼濱塔の地なりとする說に[註29]讃成する。此の地は隋の煬帝が高句麗を征した時、遼東郡及び通定鎭を置いた所（大業八年）で、[註30]それ以前は高句麗に屬し、武厲邏（邏は城堡の意味）が置かれ、遼水を渡る者を警察してゐた所である。[註31]隋以後は支那の有に歸してゐたものの如く、貞觀十九年四月、高句麗遠征軍を率ゐた唐將李世勣は、營州を發し、今の廣寧附近に比定せられる懷遠鎭より遼河を渡つて高句麗領に侵入するが如く陽動しつつ、通定鎭（即ち新城）より渡河して高句麗の不意を衝き、此が成功して高句麗の遼東保衛は一時全く危殆に瀕したことがあつた。[註32]高句麗が先制攻擊に於いて先づ新城方面を衝いたのは、かうした苦い經驗から此の橋頭堡を己の手に固め置かんとしたものであらう。通定鎭（遼東新城）の地は、後年契丹大帝國の時代に於いても契丹の本據と遼東地方とを結ぶ最大の交通幹線を抑へる要衝であつた。[註33]されば貞觀末年に契丹の主力が唐に歸屬してその一翼となつてからは、高句麗としては此の方面の形勢に對して特に嚴戒を要することとなつたわけで、さればこそ前轍を恐れた高

句麗が先づ此所を確保して契丹の萬一の動きに備へんとし、却つて契丹主力の強力な反擊を受けることとなつたのであらう。撫順の地なる新城は高句麗の遼東統治の最重要據點であつた。從つて特に軍を繰出して先制攻擊を試みた高句麗が契丹と此の撫順なる新城の地で戰ふ筈なく、又此所迄契丹の侵入を許し、更に敗走するが如き醜體を演じたとも思はれない。新城を撫順に限定せんとする考へは、大勢上認め難い樣である。

新城の戰以後も契丹が唐軍の有力な要素として奮戰して居たことは、資治通鑑卷二〇〇唐紀・顯慶三年（六五八）七月の條に

營州都督兼東夷都護程名振。右領軍中郎將薛仁貴。將兵攻高麗之赤烽鎭拔之。斬首二千五百級。高麗遣其大將豆方婁帥衆三萬拒之。名振以契丹逆擊大破之。斬首四百餘級。

とある一例[註34]から察知せられる。

窟哥は唐の榮寵を受げて國姓李を賜はり、顯慶の初めには左監門大將軍に拜せられたが、その死後、奚・契丹相率ゐて叛し、幾何も無く奚は降り、契丹の叛帥松漠都督阿卜固は擒へられた。時に顯慶五年五月である。然し此等の叛徒は一部の者であつたらしく、李窟可や孫敖曹の子孫は何れも唐に依附したまま則天武后の萬歲通天（六九五）に及んでゐる。されば契丹軍は依然高句麗征伐に從征してゐたものと想はれる。資治通鑑卷二〇〇唐紀・龍朔元年（六六一）四月庚辰の條に

以任雅相爲浿江道行軍總管。契芯可力（突厥人）爲遼東道行軍總管。蘇定方爲平壤道行軍總管。與蕭嗣業及諸胡兵。凡三十五軍。水陸分道並進。

とある如く最後迄胡兵（外人部隊の意）を利用した唐の遠征軍中には常に契丹軍が混つてゐたと見て誤りあるまい。一方靺鞨の高句麗への協力も、次節に說く如く、高句麗滅亡の日迄變らなかつた。されば隋→唐と高句麗との長年にわたつて繰返へされた激烈な攻爭は、契丹と靺鞨とを遼東の野に相毆らしめたものと云ふことが出來る。

高句麗の靺鞨に對する勢力範圍は晩年に至る程擴大し、粟末・白山兩部を盡く直轄すると共に、伯咄・安車骨や拂涅の一部をも風靡してゐた樣である（別章に專考）。從つてその危急存亡に關する對唐戰に於いて遼東に繰出した靺鞨兵の範圍がどの部に迄及んでゐたかを見極めることは、關係史料の所傳極めて乏しい現在、頗る容易でない。然し高句麗の直轄領に入つて居たのが粟末・白山兩部であつたこと、その中戰場に近かつたのは粟末部で白山部は遠く隔り、且つ彼等は京城防衛や對韓族防禦に使用せられてゐたこと（後述）等を考慮するに、遼東に奮戰した靺鞨の主力は粟末部人であつたと解せられる。冊府元龜卷三五七將帥部・立功門に

張儉。貞觀初。以軍功累遷朔州刺史。後爲檢校營州都督府事。營州所管契丹・奚・霫・靺鞨諸蕃皆隣接境。粟末靺鞨最近。高麗引衆數千來寇。儉率鎭兵及諸蕃首領邀擊之。中略。拜營州都督及行軍總管征遼東。

とて高句麗が粟末靺鞨を率ゐて入寇したとある。而して此を邀擊したのは檢校營州都督（營州都督事務取扱）張儉で、その後ち彼は正式の都督となり、又行軍（遠征の爲めに組織せられる戰時編成の軍團）總管として高句麗を討つた者である。彼が營州都督兼行軍總管として高句麗を伐つたのは、先に引用した資治通鑑卷一九七

唐紀・十八年七月甲午の條の高句麗討伐の詔文中に明かな如く、此の時決行した第一回高句麗征討の際で、彼は契丹等の兵を率ゐて先鋒となつて居るのである。從つて高句麗が粟末靺鞨數千を率ゐて入寇したのは、それよりも前でなければならぬ。即ち右の記事に依つて唐軍の來征免れ難しと觀じた高句麗が先制攻擊を敢行したこと、唐との戰に遼東で奮鬪した靺鞨の主力が粟末部人であつたこと等を知り得るのである。尙高句麗が滅亡せんとした時、遼東に馳せ參じて防衛に奮戰した靺鞨人が輝發河流域、吉林・烏拉を中心とする北流松花江流域、及び伊通河流域等の粟末部人、即ち全粟末部人を擧つて居たことは、當時の史料によつて充分親知せられるのであつて、高句麗に協力して唐軍と戰つた靺鞨の主力が粟末部であつたことは殆んど確示し得るのであるが、此に就いては別に詳述する。

以上論述し來つた所を要するに、靺鞨、特に粟末靺鞨と契丹とは隋より唐にかけて高句麗の滅亡する迄遼東の野に激鬪を交したのである。然しそれは決して兩民族自身の利害の衝突や勢力爭ひ、乃至反感を主因としたものでは無く、隋→唐と高句麗との二大强國の爭ひに捲込まれたものである。勿論、彼等兩族の好戰掠奪欲が彼等を從征せしむる大きな因子となつてゐたことは認めなければなるまいが、互に相容れ得ざる絕對的對立關係に出たものとは認め難い、然も契丹の攻爭參加は初めその一部であつたのがやがて全民族に及び、粟末部も初めは伊通河流域の者は局外に在つたのが後には全部族に及び、鎬を削つて戰つた。かく互にその武勇を振つて相殺戮劫掠し、長年攻爭して居た間には自ら仇敵感情を生長せしめ、對立觀念を深めて行つたであらう。後年、高句麗遺民と粟末・白山靺鞨との結合によつて建國せられた渤海と契丹とはその間に

深い民族的反感を横溢させてゐるが、その原因には、彼等が互に大勢力に生長して滿洲に覇を爭ひ、相容れぬ對立勢力に發展したと云ふ現實以外に、右の如く、隋→唐と高句麗との攻爭に聯關して契丹と高句麗・粟末靺鞨とが長年敵視爭鬪したと云ふ歴史的要素も影響してゐたと見る可きであらう。

（參考）　弱小民族の兩屬

粟末靺鞨と西方遊牧民族との關係に對する上來の論究に於いて、隋→唐、突厥→薛延陀、高句麗等の强大な國家の間に介在し、それ等强國に對して常に被支配的な立場に立つて居た契丹・靺鞨等の弱小民族の兩屬に就いて言及する所があつたが、此の弱小勢力の兩屬關係は東亞の國際史を一貫して常に生起してゐる問題であり、當面の課題たる粟末靺鞨の對外關係に於いても見出されるので、此所に此の兩屬問題に就いて大要を概說しておく。但し此の兩屬問題を東亞國際史の立場から專攻詳述することは明かに本稿の直接目的外に屬し、且つ多大の紙幅を要するので、此所では只從前に論述し、又兩後に論及する所の靺鞨の立場の理解を資ける參考として簡單に扱ふに止める。

突厥→薛延陀の靺鞨・奚・契丹・霫・室韋等弱小民族に對する支配體制に就いては已に論述した如くである。此の支配體制の維持、及び此の體制を通じて作用する支配力の强弱が支配者たる突厥→薛延陀自身の實力の大小によつて決したことは勿論であり、その事實は已述の考說中にも徵見することが出來る。即ち薛延陀よりも突厥がより大なる支配力を振ひ、更に突厥のみに就いて見るも、控弦百餘萬と云はれてその全盛時代を誇つた始畢可汗の世に於いて最も强大な支配力を浸透せしめて居たこと、已述の如くである。

次に此の支配力は支配者側に盛衰なき場合でも、被支配者たる弱小民族側の實力の大小及びその伸縮によつて增減があつた。例へば被支配者たる靺鞨・室韋・奚・契丹・霫等の中では最も活力に滿ち勇强であつた契丹が動々もすれば羈絆を脱して自由を恢復せんとし、その統治が最も困難であつた。突厥が此所に特に吐屯を置き、後年の回紇も監護使を置いてゐること、契丹が吐屯を殺して叛した例のあること等はかうした難治を思はせる事件である。

次に支配力の强弱を決せしめる一條件をなしたものに、その位置、即ち支配勢力よりの距離の遠近がある。粟末靺鞨と黑水靺鞨とは左程强弱の懸隔があつたとは思はないが、突厥との關係は、前者は東方統轄の設に入れられて從征を强ひられ、後者は只入貢して貿易の利を收めて居る程度で、その感受せる突厥の支配力には雲泥の差が認められる。

以上の諸關係は史例の列擧を俟つ迄も無く、誰しも容易に氣附き得る所であるが、尙此の外に見逃してならぬ支配力決定の一大要素があつた。それは第三勢力との關係である。此を具體的に突厥・薛延陀に就いて云へば、その支配力の大小强弱は第三勢力にして突厥に拮抗せる隋→唐との關係によつても變化し、時には高句麗との關係によつても動かされて居た。即ち支配者たる突厥・薛延陀や被支配者たる契丹・靺鞨等の主從双方に實力關係の變化無くとも、第三勢力たる隋→唐の隆替によつて突厥の支配力は大きく上下してゐたのであつて、此れ亦已に一言した所である。而して此の第三勢力の對抗に由つて生ずる支配力の動搖には二つの場合があつた。その第一は第三勢力が被支配民族に働きかけて此を離叛せしめ、己の陣營に誘致導入

する場合である。隋の開皇二年、文帝が車騎將軍長孫晟を遣し、幣賜を齎して奚・霫・契丹を誘ひ、突厥可汗沙鉢略に離叛せしめてゐるのはその例である。第二は從來の支配者に直接挑戰して此を制壓し、以て被支配者を奪ひとる場合で、此の場合には從來の支配者が敗戰の結果崩滅してその支配力を根本的に喪ふことがあつた。貞觀二十年、唐が薛延陀を擊滅して契丹以下の諸族を完全に服屬せしめてゐるのはその一例である。

以上、主として突厥→薛延陀とその配下に在つた東方の弱小民族との關係を史例としつつ、強大國の弱小民族に對する支配力變動の原因を列擧考說したのであるが、此等の諸原因は隋→唐と弱小民族との關係に就いてもそのままあてはまり、更に高句麗と弱小民族との關係に就いてもあてはまる場合が多い。換言すれば弱小民族に對する強大國の支配は、弱小民族と強大國との間に決せられるのみでなく、此の弱小民族を挾む強大國家間の關係にも強く動かされてゐたのである。更に此を云ひ換へれば、弱小民族はその好むと好まざるとに拘らず、彼等を挾んで對立する強大國家の優勢なる側に歸屬せざるを得ざる運命におかれて居たのである。彼等が生存して行く上に殘された道は大國間の勢力隆替に應じ、その優勢なる側に味方して保身をはかる外になかつたのである。所で弱小民族を挾んで對立する強大勢力の間に優劣が明確に生じ勝敗が明かとなれば、彼等弱小民族の歸屬選定は簡單容易であるが、兩者が略々均衡した場合、或は弱小民族の眼に優劣の判定がつき兼ねた場合等の彼等の歸趨決定は頗る困難となり、そこに別の關係を生ぜしめた。兩屬（或は時に三屬）がそれである。

兩屬の例は已に述べた突厥→薛延陀と唐との間に立つた契丹の場合に見られるが、尙契丹に限らず、奚・霫・室韋・靺鞨等にもその傾向を認めることが出來、更に後述する如く、高句麗と薛延陀との間に立つた伊通河流域の粟末靺鞨にも見出される。蓋し、三强國の間に介在した此等諸弱小民族は多かれ少かれ兩屬的態度を必要とする境遇を經驗しなければならなかつたのである。

唐が東突厥を滅したのは貞觀三年で、此によつてその國威は大いに塞外に振つたが、突厥の後には薛延陀があつて依然塞外の諸族を從へて居た。唐が完全に塞外の諸族を左右し得る樣になつたのは此の薛延陀を滅した貞觀二十年以後であつた。即ち唐と遊牧民族との對立は、唐の建國より貞觀三年迄（六一八→六二九）は北の突厥が優勢であり、貞觀三年より二十年迄は唐が優勢で薛延陀が壓され氣味であつたが、とにかく南北對峙し、貞觀二十年以後は北の勢力が潰散して唐の獨り天下となつたのである。此の間の突厥→薛延陀が奚・霫・契丹・靺鞨・室韋等を盡く從へ、東面統轄の設に隷せしめて居たことは已に詳說した如くであるが、然も此等弱小諸民族は一方に於いて唐にも朝貢してゐた。彼等の朝貢を諸史より拾ひ蒐め洩れなく網羅することは容易でないので、頗る不完全な資料ではあるが、此所に冊府元龜卷九七〇外臣部・朝貢門に記す彼等諸族の朝貢狀態を表示しておく。尙左表は朝貢門のみの記事を以て作製したものであるから、他の部門及び他の史書を通檢すれば更に夥しい數に上るものと豫想せられる。例へば表中に於いて契丹に次いで多く載せられてゐる靺鞨でさへも更に此の外に兩三回の入貢を加へることが出來るのである。（第三節三項參照）即ち此の表は實際の入貢回數を表して居ない不完全なものであるが、然しそれでも此の表を一見する時、突厥・薛

奚・契丹・靺鞨・室韋・霫入唐朝貢表

年號	西曆	月日	入貢民族名
武德五年	六二二	一一月	靺鞨
六年	六二三	六月	契丹
七年	六二四	二月	契丹
同	同	七月	靺鞨
九年	六二六	四月	靺鞨
貞觀三年	六二九	正月	契丹
同	同	一一月	靺鞨・契丹
同	同	——	霫
四年	六三〇	七月	室韋
五年	六三一	一一月	室韋・黑水靺鞨・奚・契丹
六年	六三二	六月	契丹
同	同	八月	奚・契丹
同	同	一一月	室韋・靺鞨
同	同	——	烏羅渾
七年	六三三	正月	契丹・奚
八年	六三四	四月	室韋・靺鞨

九年	六三五	九月	室韋
一四年	六四〇	三月	流鬼（伴黑水靺鞨）
一九年	六四五	正月	契丹・奚・靺鞨・霫
各民族入貢回數計	契丹 九回	靺鞨 八回	室韋（含烏羅渾）六回
	奚 四回	霫 二回	
備考	冊府元龜卷九七〇外臣部・朝貢門の記載のみに據り、從つて實入貢回數は此よりも多し		

延陀に服して居た頃の奚・契丹・霫・室韋・靺鞨等の弱小諸民族がその對立國たる唐にも入貢してゐた事を確めることが出來る。

入貢は、中國の傳統的見解に從へば、稱臣藩屬の國が宗主國たる中國に對して執る可き藩臣の禮であり義務であり、從つて入貢使の差遣は藩屬關係の成立存續を意味するものであつた。されば入貢使臣は必ず藩屬國としての禮に依らねばならず、若し抗禮（對等國の禮）に出るが如きことあらば、使臣は放還せられ國交は拒絶せられ、最惡の場合は征討の口實にさへ供せられてゐた。即ち中國人は入貢を以て藩屬關係、換言すれば主從關係の成立存續と解して政治的に相當此を重要視してゐたのである。入貢を受けた中國の國家は宗主國として入貢國に回賜を與へ、それは中國天朝の貫録を示すに足る高貴品・文化品でその價値の總額も入貢品のそれを遙かに凌駕せるを常例としてゐた。そこで中國周邊の夷狄は回賜の實利を覬ひ、文化品・高貴

品を入手せんが爲め、藩臣の名に甘んじて機會ある毎に朝貢してゐた。中國側でもかうした夷狄の名より實を取らんとする入貢の動機をよく知つてゐたのであるが、然しつとめてその入貢を受け入れ、財政の許す限り回賜を吝まなかつた。それは回賜を通じて夷狄懷柔の効を擧げんとしたからで、然もそれは多かれ少かれ懷撫策に役立ち、一見、名を得て實を喪ふが如き回賜も、屢々邊境綏服に大きな利益を齎してゐたのである。

さて奚・契丹・霫・室韋・靺鞨の唐への朝貢もその直接最大の目的は文化品・高貴品の入手に在つたので、總てが必ずしも突厥↓薛延陀よりの解放を欲し唐に結ばんとした政治的行動であつたとは斷じ難いが、然し必ず藩禮に依らねばならなかつた唐朝への入貢は、結局、此等入貢の諸民族をして唐との藩屬關係の成立を首肯せしめ、又入貢毎の回賜や眼のあたりに見る唐朝の政治・文化・經濟の卓絶は不知不識の間に彼等を魅了し、かくて入唐の度數を增す毎に漸次彼等の間に唐の國威を浸透させて行つたことは否み難い。突厥↓薛延陀は武力を以て唐に對抗することは出來ても、文化・經濟の面では到底太刀打出來なかつた。換言すれば弱小民族の支配を繞り唐と武力を以て爭ふことは出來ても、文化・經濟の力で向ふを張ることは出來なかつたのである。從つて弱小民族を經濟的文化的に卓絶せる唐朝に出入せしめておく事はやがて彼等をして己の手を去つて唐の懷に飛び込ましめるもととなる恐が多分に有つた。突厥↓薛延陀としてはかかる危險な入唐をその武力によつて阻止し、己に專屬せしめておくに如くは無かつたのである。然も此を斷然阻止する能はず、その入唐を許さなければならなかつたのは、突厥↓薛延陀が唐に對して絶對優勢を克ち得ず、寧

ろ逆に壓倒せられつつ辛うじて對立を保ち得た程度であつたからである。突厥が唐朝に對して優勢であつたのは僅かに唐初の數年で、此の期間は、先表に見る如く、よく弱小民族の唐朝への入貢を阻止してゐたのみならず、已述の如く、契丹等を使嗾して幷州その他の邊境に侵寇せしめてゐるのである。

弱小民族は中國に稱臣入貢すれば多大の文化的經濟的利得があつた。中國の王朝は民度の低い彼等から徵稅して國家財政の補助にするが如き考へを毛頭有せず、却つて此に惠澤を施し懷撫につとめた。中國側の彼等に期待する所は只邊患を爲さざらんことにのみ在つたのである。此に反し北方帝國は管下弱小民族に稅役を賦課し、屢々その過重に喘がしめた。新唐書卷二一五突利可汗傳に

突利斂取無法。下不附。故薛延陀・奚・霫等皆內屬（唐）。云云。

とあるはその一例である。蓋し北方遊牧帝國は此等弱小民族をその兵力財力の一大源泉としてゐたのである。されば弱小諸民族は北方勢力よりも中國に屬するを利としてゐた。機會あらば彼等は北方の支配を離れ南方の中國に稱臣入貢せんとしたのである。此を抑へた北方の力は專ら武力であつた。即ち弱小民族の中國への轉附を監視すると共に、彼等を率ゐて中國の邊境に寇し、彼等の欲する中國品を掠奪せしめ、此の掠奪欲を滿足せしめることに因つて彼等を配下に掌握して行かんとしたのである。突厥が契丹監視の爲めに吐屯をおいたこと、契丹を使嗾して邊境を侵さしめたこと等は先に述べておいたが、それには石の如き意味が含まれてゐたのである。所が中國側の王朝が隋唐盛時の如き强大な力をもち武備も充實して邊境の侵掠を許さなくなると、弱小民族には北方勢力に附して獲る利得は全く無く、只北方君主より搾取せられる丈損であつ

た。彼等が北方より南方に轉附せんとするに至るは當然である。然し全く北方帝國より離脱すれば侵暴を受ける恐れがある。そこで從前の如く北方帝國に屬しつつ南方の中國にも入貢して兩屬の關係を結ぶこととなるのである。而して今や南方中國の邊境を侵し得なくなつた北方帝國にはそれ等弱小民族の中國への通貢を全禁することは出來ず、彼等の兩屬を拱手して見送る外に仕方がなかつた。隋→唐と突厥→薛延陀との對立が略々均衡狀態に在つた時、弱小民族が北方帝國の主權に隷しつつ隋唐にも入貢して兩屬的態度をとつた所以は大體右の如くに推定せられるのである。

對立する南北の二大勢力が外觀上均衡を示して居る場合でも、更に此を詳しく比較すれば、大抵どちらかが多少重く、從つて他方が輕く、全く輕重を同じくせる場合は極めて稀である。そして此の輕重は相互に得喪を繰返へしてゐる場合が多い。弱小民族の動向は此の輕重の推移を微妙に反映して、大局的には兩屬方針を續け乍らも、その重心を時々の狀勢に應じて優勢を示した方の强國に傾けてゐる。例へば唐が貞觀四年に突厥を掃滅し、代つて塞外の覇權を握つた薛延陀に未だ充分國力を伸張する遑の無かつた時代、卽ち南北二大勢力の對立が著しく南方唐側の優勢に傾いた時は、資治通鑑卷一九三唐紀・貞觀四年八月の條に

突厥既亡。營州都督薛萬淑遣契丹酋長貪沒折。說諭東北諸夷。奚・霫・室韋等十餘部內附。

とある如く、奚・契丹・霫・室韋等の諸族は、已に貞觀三年以來薛延陀に屬して居乍ら、擧つて唐に內屬し、兩屬の重心を著しく唐に寄せてゐるのである。

先揭の契丹・靺鞨・奚・室韋・霫諸族入貢表は冊府元龜の朝貢門のみに據つた粗雜なものであるが、然も

此の中に兩屬せる彼等諸族の動向が南北二大勢力の一進一退をそのまま反映せるを認める。卽ち唐初の未だ內亂ありて突厥が絕對優勢を示して居た頃には入貢者無く、唐の國威が略々確立した武德五年頃に至つて漸く現れ初め、更に突厥を倒した貞觀四年直後に於いて最も多く、突厥に代つた薛延陀が漸く勢力を固めたと思はれる貞觀十年以後には再び減少して重心の北に歸向したことを示してゐるのである。要するに、兩屬の弱小民族が、相對立する强大勢力の一張一弛に從つてその歸屬の重心を振子の如く左右せしめてゐたのは、此の兩屬の一特色である。

次に此の兩屬に就いて注意す可きは、彼等弱小民族が全部打つて一丸となり、その去就を共にすることは殆んど無かつたと云ふことである。大抵の場合、二或はそれ以上の部派に分れ、或る者は北に附し、或る者は南に依り、それぞれ分屬して、此を民族として總觀する時、兩屬の形となつてゐた。その適例は隋初の契丹が高句麗派萬餘家、突厥派（その中四千餘家はやがて隋に轉附）、隋派に三分して居た事實に見ることが出來る。彼等弱小民族は概ね民族的自覺心を缺き、組織的能力も乏しく、全民族の團結を固め此を一主權の下に統一し得る迄に進んで居なかつたのである。何かの事情に由つて彼等が民族的自覺心を昂め統一を成就した場合、元來慓悍勇武の素質をもつ遊牧民族のこと故、忽ち强大な威力を發揮して弱小民族より一躍强大國に轉ずるを得た。後年に於ける契丹の統一强大化はその好例である。

奚・霫・契丹・室韋・靺鞨等の諸民族は何れも數多の部族より成り、各部族には酋長があつて此を率ゐて居た。此等諸部相互の關係を通觀するに、各部毎に獨立して相總一してゐない場合と、若干の部族が集まり

巨帥を推戴して聯合してゐる場合とがあつた樣であるが、後者の場合と雖も、その聯合の範圍は全民族に及ぶこと無く、且つ結合の紐帶も頗る薄弱であつた。隋書卷八一靺鞨傳に

靺鞨在高麗之北。邑落俱有酋長。不相總一。

とあるは前者の例、舊唐書卷一九九契丹傳に

其君長姓大賀氏。勝兵四萬三千人。分爲八部。若有徵發。諸部皆須議合。不得獨舉。獵則別部。戰則同行。

とあるは諸部聯合の例である。此の契丹の八部聯合も亦契丹全民族を包括してゐたのではなく、別部があつた。かくてたとへ諸部の聯合があつても、その聯合に屬せざる部族、一の聯合に對する他の聯合、一の聯合より脫して他の聯合に移る部族、さうした民族內諸部の離合集散が繰返へされ、擧族的統一の實現は頗る困難な狀態に在つた。此の困難を克服して民族的統一が成就せられた時には彼等は已に弱小民族では無く、後年の契丹の如く、强大勢力となり得たのであるから、弱小民族の內部は必ず不統一狀態に在つたと斷じて誤りないのである。かうした內部の不統一、諸派の分立は、對立する强大國家の乘ずる所となり、夫々此等の諸分派に働きかけ自已の陣營に誘致せんとした。かくて或は南に附するもの、或は北に歸するものを生じたのである。然しその諸分派には大小强弱があつた。例へば唐初の契丹は窟哥の率ゆる主力と孫敖曹等の率ゆる別派とがあつた。兩屬の重心が何れに在るかは、此の主力集團の歸屬によつて決してゐたのである。例を唐初の契丹に就いて見るに、初め唐に附して居たのは孫敖曹等の別部で、窟哥等の主力集團は突厥の配下に附

して居た。即ち兩屬の重心は北に在つたのである。窟哥は薛延陀の滅亡後、唐に歸屬した。此所に契丹は主力・別派をあげて唐に歸したのであつて、つまり兩屬をすてて專屬となつたわけである。要するに、所謂弱小民族は內部の團結統一を缺き、南北兩强大勢力の對立に挾まれた際、その或る分派は北に歸し、或る分派は南に附して兩屬の形をとり、分派中の主力的集團が何れに附するかによつて兩屬の重心が決定せられてゐたのである。但し各分派はそれそれ服屬する所の强國に心を悉して專屬し節操を立てて居たかと云ふに、必ずしも總てがさうであつたわけでは無く、形勢不利と見れば私かに他の强國にも通じて兩屬態度をとり、時には豹變轉附をも敢てしてゐた。即ち弱小民族の兩屬は頗る複雜な形をとつてゐたのである。かうした弱小民族の兩屬に對して相對立する强大國は如何なる氣持ちを有ち、如何なる對策を講じたか、次に此の點に就いて考へて見る。

弱小民族の兩屬が對立する大國にとつて不滿なものであつたことは云ふ迄もあるまい。灰色の彼等を自己の專屬下に置いて對立を有利化せんと欲したことは當然である。然し此の專屬支配の確立は對立する强大國と弱小民族との間に於いて決せられるものではなかつた。此の問題の解決點は對立する强大國相互の關係自體に在つたのである。換言すれば、弱小民族を己の專屬下に置き得るか否かは、專ら己と對抗せる强大國家を完全に壓倒し得るか否かに繫つてゐたのである。對手の强國を倒さずして弱小民族に專屬を强要し、此に壓迫を加へた所でその目的は達せられないのみでなく、却つて逆の効果を生む危險があつた。壓迫を受けた弱小民族は却つて敵對する强大國に遁入し、その援助によつて壓迫を排除せんとする恐れがあつたからであ

る。大唐が薛延陀を滅し、已に對立する北方勢力を完全に掃除し得た後ち、漸く契丹の專屬を確保して居るのはその例である。かかる關係から强大國の對立が均衡を得てゐる場合、その間に挾まれて兩屬せる弱小民族は必ずしもその兩屬の責めを追窮せられることなく、默認の中にその生活を續け得たのである。兩屬の弱小民族が危機に陷るのは、此の均衡が破れて兩强國の決戰が捲起された際である。

對立せる兩强國が愈々決戰を交へることになれば、弱小民族も勢ひその去就の態度を鮮明にしなければならなかつた。此の際、勝敗の歸趨をよく豫見して去就を謬らなかつた弱小民族は難局を順調に切拔け、然らざる者は苛酷な運命に遭はねばならなかつた。然し又、弱小民族には形勢の分明する迄傍觀的態度をとると云ふ途があり、それが出來なかつた場合でも裏切り叛附と云ふ最後の手が殘されてゐた。殊に南方中國側の北方勢力に對する一大武器は「以夷制夷」にあり、つとめて敵側の內部離間に力を注いで居たので、裏切りを歡迎してゐた。又被支配の弱小民族或は部族は夥しく群居し、强大國がそれ等を歸服せしめ懷柔して行くには、裏切り來降者を嚴罰するをさけ、寧ろ此を撫恤し、それによつて他の弱小勢力を誘致する必要があつた。されば弱小民族は、たとへ强大國家間の勝敗に對する豫測を誤り、その臣屬せる大國が敗北した際にも、敗北決定の土壇場に於いて裏切ることに依り、必ずしも悲慘な運命を共にすることはなく、大國の爭覇より受ける犧牲を最少限度に止めるを得たのである。卽ち大國間の對立が均衡的和平狀態に在る時は兩屬、破裂して決戰に立至り不利に陷つた時は裏切りと云ふ行き方に弱小民族の生存の途が殘されてゐたのである。裏切りの例は略するが、それは弱小民族が生きる爲めの止むなき行動である場合が多く、從つて此を彼等の先

天的民族的狡猾性の表れと貶し去るのは必ずしも妥當でない。契丹が北魏の時初めて史上に現れてより唐末に至る迄、數百年の長きにわたり、東は高句麗・渤海より、南は北朝→隋→唐より、北は蠕蠕→突厥→薛延陀→突厥→廻紇より交々壓迫征服せられ乍ら、然もよく弱小民族として存續し、時至りて遽に大勢力に發展し得たのは、彼等が弱小民族として生き得る處世法とも云ふ可き此の兩屬・裏切りを巧みに使ひ分け、民族の活力を徒らに消耗しなかつたことがその一大要因であつたと思はれる。

以上、弱小民族の兩屬に就いては、主として例を突厥→薛延陀と隋→唐との間に介在する契丹に取つたが、此は已述の範圍が殆んど突厥→薛延陀と隋唐及び契丹に限られ、例をここに求めるのが最も好都合であつたからである。此を靺鞨に就いて見るに、やはり契丹と略々同樣のことが云へる。靺鞨は廣大な地域に住み、少からざる戸口を有し、性質勇强で、强大民族たる可き素地を具へ、事實又渤海なる海東の盛國を築き上げても居るのであるが、七部時代の彼等は未だ文化低く、統一なく、現實の勢力より云へば明かに弱小民族であつた。そして此を取捲く强大勢力は已述の突厥→薛延陀と隋→唐及び高句麗であつた。されば靺鞨は此の遊牧勢力・中國・高句麗の諸大國間に介在して兩屬を超えた三屬關係を結ばねばならなかつた。かく靺鞨が三屬關係を結んで居た以上、此等三大勢力と靺鞨との關係が只支配者・被支配者としての二當事者のみによつて決してゐたと豫想することは、已述の理由によつて妥當でない。第三勢力との複雜な關係をも考慮に入れて行かなければならぬのである。更に具體的に云へば、突厥→薛延陀と靺鞨との關係は只此の兩當事者のみからの考察では充分眞相を悉したものとは云へないのである。第三勢力としての中國及び高句麗の影響を

も併せ考へなければならぬのである。此の意味に於いて、從前論述し來つた粟末靺鞨と突厥↓薛延陀との關係は未だ不充分で、第三勢力との關係を考慮した補足が必要である。然し此は未だ高句麗及び支那と靺鞨との關係を明かにしてゐない爲め止を得ざる所で、後節に於いて夫々高句麗及び中國との關係を扱ふ際、逐次補足して行くこととする。

（註）

1　突厥の官名は隋書、新舊兩唐書の各突厥傳に列擧せられてゐるが、その內容には互に若干の出入がある。

2　隋初に於ける突厥の東邊統轄の設を突利設と云ひ、隋末唐初のそれを泥步設と稱しその統主を突利可汗と名けてゐる所を見ると、突利とは東方に緣ある突厥語ではないかと思はれるが、突厥史には素人の筆者に此の點を明かにする力はない。

3　傳によつて官の數、その順位等に若干の相違がある。

4　隋書の傳に「設」を說いて「設特勒」とあり、新唐書の傳に「子弟曰特勒」とあるを參照。

5　泥步設突利可汗はその一例。

6　都督府を置いた州、即ち所謂都督州は府と呼ばれることがあつた。資治通鑑（卷一九八）唐紀、貞觀二十二年十一月唐子の條に奚。契丹が主力を擧げて唐に內附したので、奚に五州、契丹に九州の羈縻州を置き、諸酋長を刺史とし、別に總帥の牙庭に都督府を置き、契丹の李窟哥と奚の可都者とを都督として夫々兩民族を率ゐしめたことを述べ、

（略）以契丹部爲松漠府、以窟可爲都督、（略）以奚部爲饒樂府、以可度者爲都督、云云

とて松漠都督州、饒樂都督州を府と呼んでゐる。黑水州は同じく羈縻州であり、都督府が置かれてゐたのであるから、時に黑水府と呼ばれても怪しむに足らぬ。更に黑水都督府には經略使が置かれてゐた。所で當時嶺南に置かれ

て居た廣州、邕州、桂州等の五經略使を總括して嶺南五府經略使と稱し、經略府設置の州が府と呼ばれてゐたことを示してゐる。されば此の制度より見るも黑水州は黑水府とも呼ばれ得たわけである。尙經略使の制は唐の中葉に初まるが、都督府は唐の初葉に總管府を改稱したものである。かく考へるに、黑水府と黑水州の異同を論じたり、府を州の誤りなりと斷じたりする必要はないわけである。

7 滿鮮地理歷史研究報告第十五「勿吉考」

8 同　上

9 册府元龜（卷一七〇）帝王部・來遠門、新唐書（卷二二〇）流鬼傳

10 歷史地理九ノ一〇、白鳥博士「唐時代の樺太島に就いて」

11 和田博士著「東亞史論藪」の民族篇「支那の記載に現れたる黑龍江下流域の原住民」

12 資治通鑑（卷一九六）に據る。

13 同書（卷一九八）に據る。

14 但し詳しく云へば四年以前より突厥の勢力を凌ぎつつあつた。此のこと後文に論及する。

15 卷一九七

16 新舊兩唐書各傳に同一記事あり。

17 烏羅護は室韋の一部族である。從つて室韋烏羅護の一句は二つに切る可きか、一つに續ける可きか、判別しかねる。薛延陀の勢力は必ずしも烏羅護にのみ止まつたのではあるまいと解して一應句切つておいたが、尙考ふ可きである。

18 貞觀十九年の唐と高句麗との第一回交戰に於ける安市城の戰。詳しくは本論後文參照

19 高句麗は唐に對抗する爲め靺鞨を介して薛延陀と提携せんとした形迹がある。このことは本論後文に詳論するが、唐が靺鞨抱込みに力を注いだのは、此の提携防止が一因であらう。

20 隋書契丹傳、高句麗傳及び滿鮮地理歷史研究報告第一所收、松井學士「契丹初興史」
21 册府元龜卷三五七將帥部、立功門に同記事あり。
22 册府元龜卷四二九將帥部、守邊門に同記事あり。
23 長期戰の策をとつたことは資治通鑑卷一九八に明文あり。
24 同記事は册府元龜卷一二五帝王部、料敵門、同書卷一二六同部、納降門等にも見える。
25 使臣入唐のことは資治通鑑卷一九九に據る。
26 同記事は資治通鑑卷一九九にも見える。
27 滿洲歷史地理第一所收、松井學士「隋唐二朝高句麗遠征地理」
28 滿鮮地理歷史研究報告第一卷所收、津田博士「安東都護府考」
29 上述松井學士說
30 郡と鎮との治所は同一地である。
31 同上松井學士論文及び資治通鑑卷一八一大業八年七月の條の記事及び胡註參照
32 資治通鑑卷一九七に據る。
33 契丹は此所に遼州を置き、北女直兵馬司の治所としてゐた。北女直兵馬司は鐵嶺開原より八面城、懷德方面の軍政を統轄してゐたものである。尙このことは別稿に詳論する。
34 册府元龜卷一三五帝王部、好邊功門に同記事あり。

第二節　高句麗との關係

靺鞨、特に粟末靺鞨に取り最も重要な關係をもつた國は高句麗であつた。それは彼等が同じ濊貊系民族で然も同じ滿洲に隣接して住してゐたこと、後年の渤海國が唐に滅された高句麗の遺民と粟末靺鞨との合作によつて建國せられたこと等からも容易に察知せられる所であるが、尙兩者の關係に就いては緊密にして複雜なものがあり、その究明には大きな努力が拂はれねばならぬのである。

高句麗と粟末靺鞨との關係は極めて古い。先に考說した如く、粟末靺鞨は夫餘族の裔である。即ち南北朝時代以前に夫餘族と呼ばれたものが隋代以後の粟末靺鞨に外ならぬのであるが、高句麗と夫餘とは古くより緊密重大な關係をもち、從つて粟末靺鞨と高句麗との關係は此の夫餘族と呼ばれてゐた時代からの古い沿革をもつてゐるのである。同樣に白山靺鞨は沃沮族の裔であり、沃沮と高句麗とも夙くより深い關係をもち、從つて白山靺鞨と高句麗との關係も古い沿革を有つてゐるのである。

高句麗と靺鞨との關係を傳へた史料は殆んどすべて中國側の文獻に限られ、半島側にも三國史記があるが、その記す所は大抵中國側文獻よりの轉載にすぎず、獨自の價値を有するものは極めて少い。從つて研究の基礎も隋唐の史書に置かざるを得ない。かかる關係から、考察を隋代と唐代とに分ち、以て研究述說の便宜をはかることとする。

第一項　隋代に於ける關係

隋代に於ける粟末靺鞨と高句麗との關係には相反する二つの面があつた。臣服協從と對立寇敵とである。先づ前者の面から考說する。

高句麗はその西境保衛の立場から支那の統一を喜ばず、南北朝時代には、一方北朝に修貢しつつも他方秘かに南朝に通じ、南北の對立に油を注ぎ、且つ南朝をして北朝の北邊經營を南方から牽制せしむる策を採つてゐた。されば隋が南朝を亡して天下を統一すると、高句麗はその來征を深く警戒し防衛態勢を益々固め抗拒的態度を顯示した。此に對して文帝は責讓の詔文を送り高句麗の恭順を要求したこともあつたが、高句麗は遂に心服の色を見せず、資治通鑑卷一七八開皇十八年二月の條に

高麗王元。帥靺鞨之衆萬餘。寇遼西。[註35]營州總管韋沖擊走之。上聞而大怒。云云。

とある如く、[註36]却つて靺鞨兵を帥ゐて隋領を侵犯した。即ち最初の對隋戰に於いて靺鞨兵の協力してゐたことが確認せられるのである。尙此の侵入軍は靺鞨兵のみでは無く、靺鞨兵を含めた高句麗軍の意味であらう。單に靺鞨と云つて居るのは彼等が先鋒として進入し來つた爲めであらう。高句麗が常に靺鞨兵を先鋒としてゐたことは先に考說した如くである。又此の靺鞨が主として粟末人であつたと解せられることも先に述べた如くである。此の侵入に憤慨した文帝は、同年六月、高句麗征伐を斷行した。然し水潦と暴風との爲めに海陸軍ともに失敗し、一方高句麗も表面陳謝の意を示したので、事の成り難きを察した文帝はそれを機に征伐をやめた。所が高句麗の陳謝は本心からでなく、當面を凌ぐ爲めの糊塗策で、寧ろ却つて傲慢となつたので、煬帝即位するに及び大々的遠征を斷行した。此の大遠征は大業八年より十年にかけて數次にわたり（七年よ

り準備)、特に八年正月派遣の軍勢は一百一十三萬三千八百人、二百萬と號し、尙その外に運糧に徵發した鹿車夫のみで六十萬に達したと云ふ。然も此が悉く失敗し隋朝の命取りとなつたことは周知の如くである。此の戰に於いても靺鞨の高句麗への從征が認あられる。隋書卷六〇段文振傳に、彼が遼東の戰陣中に於いて煬帝より戰局打開の策を問はれ、速進速退何れかに速決し遲疑逡巡を排す可しと答へたことを述べ、その理由として

如不時定脫。遇秋霖深爲艱阻。兵糧又竭。强敵在前。靺鞨出後。遲疑不決。非上策也。

とて高句麗に味方せる靺鞨の後方迂廻遮斷の恐る可きことを擧げてゐる。資治通鑑卷一八一に依れば、此の答問は大業八年二月である。此の靺鞨も亦粟末部が主であつたと見る可きであらう。

靺鞨の高句麗への協力は隋以前にもその著例を見る。即位後間もない文帝が突厥の侵寇に震怒して討伐の詔を下したことを述べ、その中に

上略。往年利稽察大爲高麗。靺鞨所破。

とて高句麗・靺鞨の軍が力を協せて突厥の侵入軍を破つたとある。此の詔は開皇三年四月の突厥大征伐の前に出されたものであるから、高句麗・靺鞨が突厥を破つた往年と云ふのは、隋以前であつたこととなる。此の突厥の侵入軍を破つた靺鞨も亦粟末部人であつたことは極めて明かである。尙此の事件が三國史記卷一九高句麗本紀・陽原王七年(北齊天保二年=五五一)秋九月の條に

突厥來圍新城。不克。移攻白巖城。王遣將軍高紇領兵一萬。拒克之。殺獲一千餘級。

とある記事に該當す可きものなることは、前節に論述した如くである。以上の考察を要するに、粟末靺鞨は北朝より隋末に至る迄高句麗に協力しその危急に際しては從軍し、軍の先鋒として常に奮鬪してゐたのである。

穢つて隋書の靺鞨傳を見るに

其一號粟末部。與高麗相接。勝兵數千。多驍武。每寇高麗中。

とて粟末靺鞨は數千の勝兵を擁して高句麗と對立し常に寇敵してゐたと明書して居る。此の記事を疑ふ可き理由は無いから、隋代の粟末靺鞨が高句麗に對立し侵寇してゐたのは紛れない事實と認めなければならぬ。而して又粟末靺鞨が高句麗によく協力してゐたことも、文獻の確證する所であるから、寇敵が兩者の間の唯一の關係であつたと見ることは出來ない。即ち上掲隋書の「每寇高麗中」は紛れない事實ではあるが、同時に亦唯一の關係でもなく、兩者の關係は相反する二面をもつてゐたと解しなければならぬのである。然らば此の二面關係は、同一集團がその時々に態度を更へたものであるか、それとも粟末部が親高句麗派と反高句麗派とに分れてゐた結果であるかと云ふことが新に問題となつて來る。

粟末靺鞨は夫餘族の裔である。所で此の夫餘族と高句麗との關係を見るに、初め夫餘は滿洲第一の大國であつたが、鮮卑に首都を襲破せられてから急速に衰へ、高句麗は此に乘じて輝發河流域を占領し、永和二年（三四六）以前には更に吉林・烏拉方面をも取り、夫餘國をして農安を中心とする伊通河流域に追詰め、更に此を屬國としてゐた。所がその後ち勿吉が勃興し、夫餘國を攻め、その王と一族とを高句麗に奔らし（太

和十八年＝四九四）、やがて伊通河流域を完全に占領した。續いて六世紀の中頃、西方に新に勃興した突厥は勿吉を逐うて伊通河流域を領有した。從つて夫餘族は早くより二分せられ、輝發河流域及び吉林・烏拉を中心とする北流松花江流域の住民は永和二年（三四六）以前より高句麗に臣屬し、伊通河流域の者は五世紀の末より勿吉に屬し、次いで突厥の支配下に入つてゐたのである。此の夫餘族の隋代に於ける呼稱が粟末靺鞨である。されば隋初の粟末靺鞨は輝發河流域、吉林・烏拉を中心とする北流松花江流域の高句麗に臣屬せる者と、伊通河流域の突厥に屬する者とに分れてゐたわけである。隋初の突厥が伊通河流域の靺鞨を從へて居たことは前節に詳述した如くである。かく考察すると、高句麗に協力して突厥や隋の侵人軍を邀擊奮戰したのが輝發河・北流松花江兩水流域の高句麗に臣從せる粟末靺鞨であり、高句麗に寇敵したのが伊通河流域の突厥に服屬せる粟末靺鞨であつたことは自ら想到せられるであらう。尤も此の寇敵せる伊通河流域の粟末靺鞨も、開皇三年、突厥が隋に伐たれて東西に分裂し、その背景と賴む突厥の支援を喪つてから高句麗に征服せられたのであるが、その經緯は、史料の關係上、粟末靺鞨と隋との關係を究明し、それに已述の突厥と粟末靺鞨との關係をも併せ考へた後ちでなければ說明し難いので、止むなく後文に扱ふこととする。突厥・中國は高句麗と粟末靺鞨との關係に於いては明かに第三勢力であり、弱小民族の對外關係が兩當事者以外に、第三勢力の影響によつても大きく左右せられてゐた例を此所にも見受けるわけである。

第二項　唐代に於ける關係

靺鞨と高句麗との關係に就いて舊唐書の傳が記す所は

其國凡爲數十部。各有酋帥。或附於高麗。或臣於突厥。

とある簡單な一句に上まり、新唐書の傳には此の句さへ省略せられてゐる。右の突厥に屬したと云ふ靺鞨が主として伊通河流域の粟末靺鞨を指してゐることは前節に詳論した如くである。彼等は先に述べた如く、南北朝末より隋初にかけて突厥に屬し、開皇三年、突厥が隋に伐たれて一時衰へた後ちは高句麗に征服せられて居た者で、それが唐初に再び突厥に歸して居た所を見ると、隋末に倍舊の勢力に盛返した突厥は又もや高句麗を驅逐して此の地方を奪還したものと解せられる。但し後述する如く、貞觀四年、突厥が唐に伐たれて潰滅すると、再び高句麗の有に歸した。而して突厥に代つた薛延陀が勢力を伸展すると、その東端の領域は此の地方に及んでゐたこと、既述の如くであるから、此の地域は三度び高句麗の手を離れたわけであり、更に貞觀二十年の薛延陀の滅亡によつて三度び高句麗に歸したわけである。薛延陀の滅亡以後は高句麗の滅ぶ迄強大な遊牧國家は興らずず、從つて此の方面の粟末部は最後迄高句麗の支配に歸してゐた。尙舊唐書の傳には高句麗滅亡後の所に

白山部素附於高麗。

とあり、新唐書の傳にも

白山本臣高麗。

とあり、白山靺鞨が夙くより高句麗に臣服してゐたと傳へてゐる。前章に詳論した如く、白山靺鞨は沃沮族の裔であり、沃沮族は南北に分れ、南北沃沮は已に三國時代に高句麗に臣屬し、北沃沮は一時夫餘國に轉屬

してゐたのを廣開土王（三九二―四一二）の時再び奪還し、[注23]從つて白山靺鞨は隋代を溯ること百數十年（北沃沮）乃至三百數十年（南沃沮）前から高句麗に臣屬し、以て唐代高句麗の滅亡（六六八）に及んだのである。

唐初極盛時の突厥及び薛延陀の粟末靺鞨に對する支配が伊通河流域に限られて居たとすれば、渾發河流域や吉林・烏拉方面の粟末靺鞨が、隋代に引續き、唐代に於いても高句麗に臣屬してゐたことは自ら明かで、先揭舊唐書の傳に「或臣於突厥」とある一句と並べられた「或附於高麗」の內容も主として北流松花江及び渾發河流域の粟末靺鞨を指して居るものと見て大過なく、且つそれは唐初の形勢であつたのである。要するに高句麗は唐初には渾發・北流松花二水の流域の粟末靺鞨を支配するに止まつてゐたが、貞觀四年、突厥が滅ぶに及んでその配下に在つた伊通河流域の粟末靺鞨をも併せ、やがて突厥に代つた薛延陀が發展するや一時伊通河流域の支配を制せられたが、貞觀二十年、薛延陀も亦滅んだので此を恢復するを得、その後には大遊牧帝國の出現を見なかつた爲め、滅亡の日迄、如上三地方を併せた全粟末靺鞨の支配を維持確保するを得たのである。

高句麗に隷屬せる靺鞨はよく臣服協力の實を盡した。此を最も顯著に示してゐるのは、高句麗の運命に決定的關係を有つてゐた唐との激鬪に於いてであり、從つて又それは主として粟末靺鞨の活躍であつた。

隋の大遠征軍を邀擊潰滅せしめ隋朝倒潰の因を與へた高句麗は益々己が國力を過信し、唐建國後も中國侮蔑の態度を改めなかつたので、兩國の關係は初めより險惡な空氣を孕んでゐたが、貞觀十八年に至つて遂に

衝突し、唐の大遠征となつた。此の役は同二十年迄續いたが勝敗決せず、爾後も、貞觀二十一・二十二、永徽六、顯慶三、同四、龍朔元・二、乾封元→總章元年の六回にわたつて交戰が繰返へされた。都合七回の此の戰役中、最も大規模で凄烈を極めたのは第一回と第七回とで、更に第一回の戰役中最も激戰となつたのは安市城（安地城、今の海城東南三邦里の英城子）の攻防であつた。冊府元龜（卷一一七帝王部・親征門・貞觀十九年六月の條に、此の攻防戰を述べて

丙辰。次於安市城北列營進兵以攻之。丁巳。高麗北部耨薩（官名、此下脫高延壽名）高惠眞率高麗・靺鞨之衆十五萬。中略。斬首二萬級。中略。己未。高延壽・高惠眞率三萬六千八百人請降。

とて唐軍に圍まれた安市城を救はんと馳せつけた高句麗國軍十五萬（此の數字には誇張があらう）中に靺鞨兵の居たことが見える。尙上文の中略部分に、此の援軍を邀へた太宗の言として「高麗常令靺鞨居前」とあり、勇武を以て聞えた靺鞨が常に先鋒進擊の役をつとめてゐたことが知られる。同じく太宗は此の靺鞨の遊擊的襲擊が最も恐る可きであるとも述べてゐる。右安市城救援軍の投降者に對する處分は、上文の續きに次の如く記してゐる。

簡耨薩已下及酋首三千五百人。授以爵秩。遷之內地。餘衆三萬餘人並釋俘放還平壤。中略。靺鞨三千五百人。盡坑殺之。

即ち高句麗人には寬大であり乍ら靺鞨人には慘酷を極めてゐる。靺鞨の高句麗への協力を妨げんとしたものか、それとも投降前に唐軍に與へた損害に仕返しをしたのか、その邊の事情はよく判らないが、とにかく

唐が高句麗に協力する靺鞨人に惡感情を抱き、此に極刑を以て臨む方針を採つてゐたことが窺はれる。尙投降軍に於ける高句麗兵と靺鞨兵との割合を見るに、大約十對一で、その率は必ずしも大でないが、俘獲靺鞨兵の數三千五百人より推せば、救援に繰出された靺鞨兵の總數は恐らく萬を以て算へたであらう。此の靺鞨兵の所屬部名は記されてゐないが、やはり粟末部が主であつたであらう。但しその中の伊通河流域の者は、當時最盛期にあつた薛延陀の支配を受けてゐたのであるから、明かに高句麗軍に從征協力したのは渾發河・北流松花江兩流域の者であつたと見なければならぬ。然らば伊通河流域の粟末靺鞨は此の時如何なる態度をとつてゐたであらうか。

冊府元龜卷九九一外臣部・備禦門・貞觀二十年六月の條に

上略。及太宗拔遼東諸城破駐驛之陣降高延壽。聲振戎狄。而莫離支泉蓋蘇文潛令粟（末）靺鞨誑惑延陀。唱以厚利。延陀氣懦不敢動。

とて第一回征戰に痛擊を被つた高句麗が援を薛延陀に求めんとし、粟末靺鞨をして此を斡旋せしめたことが見える。此の記事に就いては先に言及する所があり、後文にも更に論究する豫定であるが、此所に特に必要な部分を取出して說明すれば、此の斡旋に立つた者は、粟末部中の伊通河流域、即ち今の農安を中心として住んでゐた一團の勢力であつたと考へられる。此の方面の者は、已述の如く、薛延陀に隷屬し阿波設に入れられてゐた。かかる關係から高句麗の救援交涉を突厥に斡旋したものと思はれる。而して彼等が高句麗の依賴を受けその爲めに奔走した所を見ると、彼等は薛延陀に臣服すると共に、他方高句麗にも通じ、强大國に

挾まれた弱小勢力の保身法たる兩屬の途を歩んでゐたのであらう。但し薛延陀は唐の第一回高句麗遠征が終つた貞觀二十年を以て滅び、爾後此の伊通河方面も高句麗に專屬した。從つて第二回以後第八回に至る高句麗と唐との攻防戰には彼等も高句麗に從征したと見る可きである。

乾封元年に初まつた最後の討滅戰は第一回の遠征と共に彼我の攻防最も凄烈を極め、激戰の連續であつたが、此の戰に於いても粟末靺鞨の全面的協力が認められる。舊唐書卷一九契苾荷力傳に

乾封元年。又爲遼東道行軍大總管兼安撫大使。高麗有衆十五萬。屯於遼水。又引靺鞨數萬據南蘇城。何力奮擊皆大破之。斬首萬餘級。云云。

とて數萬人の靺鞨軍が南蘇城に據つて唐軍を拒いだとあるは、靺鞨の高句麗への協力の一例である。南蘇城は今の撫順の東方薩爾滸城に比定せられる所である。後文に論證する如く、右の靺鞨は渾發河流域の粟末部人で、彼等の本據を出でて南蘇城に入り、高句麗軍に協力して唐兵の東進を防いでゐたものと解せられる。[註31]

尙右記事に依れば、契苾何力は遼水に屯した十五萬と號する高句麗軍をも擊破したとあり、新唐書卷一〇同人傳にも此と同一事實を傳へた記事があつて、一見、確實な傳への樣に思はれるが、實は此の軍は扶餘地方の靺鞨兵を主力として編成せられた高句麗軍で、此を擊破したのは薛仁貴等であつた。薛仁貴等は更に敗走する右の軍を追つて扶餘城（今の農安）に至り、資治通鑑卷二〇一唐紀・總章元年二月壬午の條に

李勣實ハ李勣ノ部將薛仁貴等拔高麗扶餘城。云云。

とある如く此を陷れ、又

泉男建高句麗執權復遣兵五萬人。救扶餘城。與李勣實ハ薛仁貴等遇於薛賀水。合戰大破之。斬獲三萬餘人。

とある如く、扶餘城救援に馳せ參じた靺鞨數萬人をも擊破した。此の扶餘城救援に向つた靺鞨は吉林・烏拉方面の者と解せられる（後文參照）。即ち唐と高句麗との最後の決戰に於いて、粟末靺鞨は伊通河方面より十餘萬、輝發河流域及び吉林・烏拉地方より各々數萬を繰出し、全部族を擧げて高句麗の爲めに奮戰してゐたことが認められるのである。[註40] 尙冊府元龜卷三四七將帥部・立功門に

張儉。中略。後爲檢校營州都督府事。營州所管契丹・奚・霫・靺鞨諸蕃皆隣境。粟末靺鞨最近。高麗引衆數千來寇。云云。

とあるのも協力從征の一例である。資治通鑑卷一九七唐紀・貞觀十八年七月甲午の條に依れば、右は第一回征戰の際のことである。[註41] 此の第一回と第七回との二大戰役の間に挾まれた六回の戰役に於いても、高句麗に對する粟末靺鞨の從征協力は通じて行はれて居たと解す可きで、冊府元龜卷九九五外臣部・交侵門・永徽五年十月の條に

高麗遣其將安固。率高麗・靺鞨兵侵契丹。松漠都督李窟哥發騎禦之。戰于新城。

とあるは右の解釋を資ける一例である。右の新城が今の新民縣の東北なる遼濱塔の地に當り、重要な遼河渡口であつたこと、靺鞨が粟末部であつたこと等は先に述べた如くである。五回の中間戰に於ける協力の適證は他に索められないが、その支配關係不動の事實に鑑み協力も不變であつたと見て誤りないであらう。

粟末部と共に高句麗に臣屬し、且つその臣屬關係に於いて一層古い沿革を有つ白山部も常に高句麗に協力

從征して居たものと想はれるが、此れを明記した史料は少い。然し舊唐書卷一九〇靺鞨傳に

其白山部素附於高麗。因收平壤之後。部衆多入中國。

とあり、新唐書の傳にも此と同一事實を傳へて

白山本臣高麗。王師取平壤。其衆多入唐。

とあり、白山靺鞨が高句麗の首都平壤に入り、協力して唐軍を拒ぎ守つたと記してゐるのは、彼等の協力を示す有力な一適證である。又新唐書卷一一〇泉男生傳に

男生（高句麗執權泉蓋蘇文嫡子）走保國內城。率其衆（高句麗人）與契丹・靺鞨兵內附。云云。

とて平壤遷都以前の首都にして今の輯安縣の地に當る國內城に於いて靺鞨が高句麗に協力して居たとある。此の靺鞨が何部のものであつたか說明せられてゐないが、察するに、白山部であつたのではないかと想はれる。此所は白山部の中心たる咸興平野（南沃沮系白山部）や間島（北沃沮系白山部）に近く、相互の交通路も古くより相通じて居たし、高句麗が彼等を征服した當時の首都は國內城であつたのであるから、兩者の往來は早くより密接であつたに相違なく、又かく考へてこそ、高句麗の彼等征服が頗る早かつた理由も諒解せられるのである。されば國內城に入據して居た靺鞨は主として白山部であつたと解す可きであらう。尤も此の地方は輝發河流域との往來も比較的近便であつたのであるから、粟末部人も混つて居たかも知れない。尙先の平壤に入據せる白山部も主として咸興平野の南沃沮系であらう。

冊府元龜卷九八六外臣部・征討門・永徽六年二月の條を見るに

上略。時新羅王金春秋表言。高麗與百濟・靺鞨相連侵北境。已奪三十三城。云云。

とて高句麗と新羅との爭戰にも靺鞨が從征協力して居たとある。その所屬部名は記されてゐないが、それが主として新羅の國境に最も近い部の者であつたことは明かであらう。新羅に接住してゐた通古斯系族としては最も古く東濊が居るが、沃沮の子孫が白山靺鞨と呼ばれ、夫餘の子孫が粟末靺鞨と呼ばれてゐるのに對し、東濊族の裔を指す名稱は無く、且つ隋唐時代を通じて白山部以南に有力な靺鞨部族の居た形迹なく、東濊は何時しか新羅・高句麗に沒入して、隋唐時代には歴史上の勢力としては全く消へ失せて居た樣である。隋唐時代、新羅に接して居た靺鞨は白山部と認められ、從つて高句麗と新羅との戰に從征した靺鞨も主として咸興方面の白山部と解す可きものと思はれる。

最盛時の高句麗の勢力は白山・粟末兩部を越へて更にその北方の靺鞨諸部にも波及してゐた。此のことに就いては已に先人の指摘してゐる所であり、本稿に於いても後章に專攻する豫定であるが、靺鞨傳（此の場合舊唐書の文を示す）に

泊（伯）咄・安居（車）骨・（號）室等部。亦因高麗破後。奔散微弱。後無聞焉。

とあるに徵するも、右の大勢を窺知することが出來る。尤も右記事には謬りがあつてその正解には詳密な批判檢討を要するが、高句麗の勢力が安車骨部（阿勒楚喀河流域）や伯咄部（北流松花最下流域）に波及し此を覊縻してゐたことは紛れない事實である。[註12] 從つて此等諸部の者で高句麗に味方しその敵と戰つた者もあつたかも知れない。殊に彼等靺鞨人の通商・遠征活動が往々にして今日吾人の想像に絶する隔遠の地に及んで

ゐる事實[註43]は益々右の推想を援ける。然し白山・粟末兩部は此を直轄領とした高句麗も、それ以外の靺鞨族に對しては大體に於いて此を羈縻する程度に止めてゐた樣であるから、[註44]その協力の程度には著しい差があつたに相違無く、且つ高句麗と激爭した新羅や唐との國境からも遠ざかつてゐたのであるから、兩部以外の靺鞨族は、たとへ高句麗に協力從征する者があつたにしても、部の中心勢力を擧つた大部隊では無く、一部小數の者に止まつてゐたであらう。

以上論述した所によつて明かな如く、靺鞨諸部の中、白山・粟末兩靺鞨は高句麗の對外戰に於いてよく協力從征した。殊に粟末部中伊通河流域の者を除く他の者は、北朝末より隋唐を通じ高句麗の滅亡する迄、その彊敵たりし突厥や唐との戰に從征奮鬪し、伊通河流域の者も貞觀二十年以後は高句麗に專屬して對唐戰に奮鬪した。即ち粟末靺鞨は前後七回を計へた高句麗と唐との壓烈な激戰に殆んど全主力を擧げて高句麗軍に從征したのである。白山部に就いては唐代に於ける半島方面の戰に高句麗に從征して新羅や唐と戰つた記錄が見える丈であるが、それが南北朝・隋代に於いても同樣であつたことは、その古い臣服關係の歷史に徵して明かである。

粟末・白山兩靺鞨の高句麗に對する協力を最も具體的に示すものは上述の對外戰に於ける從征奮鬪であるが、此の從征は部分的・間歇的なものでなく、交戰毎に示された終始不變の然も擧族的協力であつた。換言すれば兩靺鞨兵は常に高句麗軍の中に加はつて居たのであつて、明かに彼等は高句麗國軍構成の一要素をなしてゐたものと解せられる。然も彼等は勇强を以て知られ、先鋒や後方奇襲等作戰上に重要且つ危險な任務

に服し、國軍中の花形とも云ふ可きものであつた。因つて想ふに、高句麗の粟末・白山兩靺鞨征服の主目的は、彼等を兵として國軍の威力を充實し、以て外は强敵に對し、內は被支配階級制壓の具として利用せんとするに在つたのであらう。尙此の靺鞨の兵としての利用に就いては、別に「高句麗國の民族構成」の問題を中心として詳考する心組みである。但し高句麗の彼等征服の一大目的が已と同種たる濊貊系諸族の統合と云ふ點に在つたことも見落してはならぬのであるが、此れ亦別に詳考する。又粟末靺鞨が長年にわたつて高句麗に味方し、唐及び此に味方した契丹と戰ひ、最後に唐に敗れ去つたことが、後年に於ける高句麗と粟末及び白山靺鞨との合同による大渤海の建國、即ち濊貊系諸族の融合を固くする素因となり、大渤海と契丹とが長く相敵視した遠因ともなり、更に大渤海が唐との爭端をさけんとして滿洲奥深くに都し、且つ唐との陸上接境を廻避した一大原因ともなつてゐるのであるが、此等に就いても別に稿を更めて詳論することとし、此所には一切言及しない。

さて上述の如く、粟末・白山兩靺鞨を從へた高句麗が彼等を國軍構成の一重要要素としてよくその協從の實を擧げしめて居た以上、高句麗は彼等に對する統治に就いてそれ相當の整つた組織を有ち、又相當の待遇を與へて居たものと見なければならぬ。然らば此の統治組織の內容、及び此と聯關する兩靺鞨の屬民としての地位待遇如何と云ふことが兩靺鞨と高句麗との關係中に於いて最も重要な問題となる。然し此の問題を直ちに此所で考說するには頗る困難な事情がある。それは彼等兩靺鞨が高句麗の所領であつた以上、その統治組織は當然高句麗の國家組織の重要な一部をなすものであり、從つて先づ高句麗の國家組織そのものを究明

した後ち、もしくはそれと併行してでなければ兩靺鞨に對する統治組織も明かにし難く、然も此の高句麗の統治組織の究明が一大問題で、此所に簡單に考說することは出來ないからである。高句麗の國家組織はその數百年の間に不斷の發展變化を逐げ、此れを究明することは高句麗史上の最大の問題なりと云ふも過言で無く、然も頗る困難な問題でもある。要するに高句麗の兩靺鞨統治の問題は明かに高句麗史上の重要な一問題として高句麗側の立場から論究して行く可きものと考へられ、從つて此所では詳考を一切略し、簡單にその大要を述べておく。詳細は高句麗研究の一部として後日別に專考する豫定である。

高句麗の國家統治組織がその數百年の間に著しい變化發展を逐げたことは上に一言した如くであるが、唐代に就いて云へば、地方を五部に分ち、部の下を州・城に分つてゐた。唐が高句麗を滅した時、五部管下の城は百七十六・戶六十九萬を計へてゐたと云ふ。[註45] 部・州・城には夫々長官を置いてゐた。勿論、此は直轄領土の統治組織であるが、粟末・白山兩靺鞨は共にその直轄領に入れられ、從つて州城制によつて統治せられてゐた。その例證は後文の附說「總章元年唐將薛仁貴の攻陷せる扶餘城」の中に於いて粟末靺鞨に就いて言及してゐるので參照を乞ひ、此所には略す。又粟末・白山兩靺鞨が未だ沃沮・夫餘と呼ばれてゐた南北朝以前の時代に於ける統治組織は本稿の範圍外に屬するので此れ亦略す。但し高句麗の沃沮統治に就いては三國時代のそれを中心として嘗て拙稿「夫餘考」に於いて論究しており、[註46] 又別に發表する豫定の「沃沮考」に於いても考說してゐるので參照を乞う。要するに隋・唐時代の兩靺鞨は高句麗の直轄領に編入せられ、本土の一部として高句麗族の場合と同樣、部・州・城制の下に統治せられてゐたのである。而して高句麗は此の兩靺鞨

の統治に於いて末端の組織に迄深く立ち入つた苛酷な統制を強ふることなく、彼等傳統の大小部制による自治を容認しつつ然も此を部州制の内に包擁して高句麗の國策推進に支障なき樣、要所大局を抑へて行くと云ふ寛容にして賢明な方針をとり、又その地位待遇も高句麗族に次いで優遇してゐた。兩靺鞨が高句麗によく協從したのは、かうした寛にして要を得た組織と運營、彼等の立場を重んじた優遇等に由つて克くその衆心を得てゐたからである。尙高句麗は己と同じ濊貊系の粟末・白山兩靺鞨に對しては此を直轄下に確保することに努力したが、純通古斯系と想はれるその他の伯咄・安車骨・拂涅等に對しては領有の意圖を最後迄持たず、只外部より此を羈縻するにすぎなかつた。此のこと亦高句麗史の立場から詳考する。

註

35 此の遼西に對しては胡三省の註があるが、それは誤つてゐる樣に思はれるので此所には引用するを避けた。

36 册府元龜卷四二九將帥部・守邊門、隋書卷四七韋沖傳にも同じ記事が載せられてゐる。

37 三國志、魏志卷三〇東夷傳・沃沮の條參照

38 史淵三十四輯所載、拙稿「夫餘國考」參照

39 本章附說「總章元年薛仁貴の攻陷せる扶餘城に就いて」參照

40 此の全粟末部の高句麗救援に就いても右の附說參照

41 此の記事に就いては第一節三項に於いて考說しておいたので回顧を乞ひ、此所には再考說するを避ける。

42 後章に於いて「高句麗滅亡後に於ける七部の動靜」を論ずる際、此の問題に就いて詳說する豫定である。

43 例へば已述の如く黑水靺鞨が遠く突厥や唐に入貢し、又渤海時代に阿勒楚喀河流域の鐵利靺鞨や拉林河流域の達魯

古部の一部の者が遠く咸興南道方面に現れ高麗の北邊を犯してゐるが如きである。

44　註(8)に同じ。

45　新唐書卷二〇二高麗傳、資治通鑑卷二〇一總章元年十二月の條、舊唐書卷三九地理志・安東都護府の條　同書卷一九九之上高麗傳等參照、但し此等諸書には州制の存在を傳へてゐない、然し三國史記卷三七地理志の中に北夫餘城州、新城州、遼東城州、屋城州、多伐嶽州、國內州等の州名が見える。

46　史淵三四輯所載

第三節　中國との關係

隋唐の文獻を涉獵するに、靺鞨入貢の記事が各所に散見し、兩朝共に靺鞨と直接の交涉を有して居たことが知られる。而して此の入貢を通じて隋・唐と直接交涉を有してゐた靺鞨の正體を追究するに、それは主として粟末靺鞨であつた。因つて本節に於いては粟末靺鞨と隋・唐との關係を詳考し、併せてその他の諸部にも及ぶこととする。

隋唐時代の粟末靺鞨は、已述の如く、或は突厥に隷し、或は高句麗に屬して居た。從つて彼等と隋・唐との關係を研究するには、已述の突厥・高句麗との關係を常に併せ參考す可きであり、又逆に支那との關係の究明によつて突厥・高句麗との關係で充分究明し得なかつた點をも補足し得るのである。即ち第三勢力との關係が此所でも大いに重要視せられなければならぬのである。以下、便宜上隋・唐兩王朝に分つて考說を進

めることとする。

第一項　隋との關係

靺鞨と隋との關係は靺鞨の對隋入貢を中心として展開して居る。隋代の文獻に見えるそれ等入貢の記事を蒐集表示すれば左の如くである。尙參考の爲め入寇記事をも併せ掲げておく。勿論、靺鞨の入貢が全回悉く

隋代靺鞨入貢表

年號	西暦	月日	記事	備記
開皇元年	五八一	七月庚午	靺鞨酋長貢方物	
三年	五八三	五月丁未	靺鞨貢方物	此歲突厥爲隋所伐東西分裂
仝	仝	八月丁丑	靺鞨貢方物	
四年	五八四	二月丁未	靺鞨貢方物	
一一年	五九一	一二月景辰	靺鞨遣使貢方物	七年、隋滅後梁、九年滅陳、天下統一
一二年	五九二	一二月己酉	靺鞨遣使貢方物	
一三年	五九三	七月戊申	靺鞨遣使貢方物	
一八年	五九八	二月一	高句麗、靺鞨寇遼西	
大業一一年	六一五	正月甲午朔	突厥、新羅、靺鞨契丹……遣使朝貢	

備考　隋書本紀、同靺鞨傳、册府元龜等に據る、

史籍に傳存せられてゐるとは斷じ難く、又現存のもので筆者の檢索未到や見落しのないことも保證し難いから、此の表を以て隋代の全入貢を網羅した完全なものと云ふことは出來ない。然し少くとも時人の重要視した入貢は主要史籍に留められた筈であるから、略々此の表中に收められてゐると見て差支へない。即ち此の表を以て彼等靺鞨の隋朝への入貢の大勢を考察する基礎として差支へないものと思はれるのである。

此の表を通觀して直ちに氣附かれることは、彼等の入貢に關する記事が極めて簡略で、只入貢の事實そのものを書きとめてゐるにすぎず、入貢靺鞨の原住地、所屬部族名、姓名、入貢徑路、動機目的、貢獻品名等、凡そ入貢に關する重要事項は何一つ述べられてゐないことである。而してかかる簡略な入貢記事を以て研究の基礎史料とせざるを得ざる所に問題の一大困難が豫想せられるのである。

さて個々の入貢記述に研究上の手掛りとなる可き事項の說明がないとすれば、殘された方法は全入貢記事の綜合的考察に依るの外ない。そこで此を綜觀するに、次の點が注意す可き事項として取上げられる。

(1) 開皇元年より十三年迄に朝貢回數が多く、前後七回、即ち隔年一貢の平均となつてゐること。

(2) 但し此の間、五年より十年に至る年間は中斷し、その中斷の前後に於いては歲貢に近い頻貢を續けてゐること。

(3) 開皇十四年以後朝貢を絕ち、それより二十二年後の大業十一年正月朔（從つて實は昨十年末）に只一回入貢してゐるにすぎないこと。

此等の諸點は上揭の入貢表が有つ史料的意義の最大のもので、何れも後論の重要基礎となるものであるか

ら、特に念頭に藏しておかねばならぬ。

さて靺鞨の入貢に就いて先づ考說す可きはその徑路で、それと聯關して彼等の原住地、即ち所屬部族名が問題となる。隋唐時代、その東北經營の基地となつて居たのは營州（柳城・和龍・黃龍＝今の朝陽）で、靺鞨の朝貢は此所を入支の關口として居た。そして彼等が此所に入るには大體二つの幹線があつた。大渤海時代の長嶺府（輝發河上流の山城子）を基點とする所謂營州道と扶餘府（農安）を基點とする契丹道とに當る路線がそれである。營州道は瑚爾喀河・輝發河・渾河の流域を連ね、高句麗の新城（撫順）遼東城（遼陽）を經て遼河を渡り、隋唐の懷遠（廣寧の東南）瀘河（義縣）兩鎭を過ぎて營州に入る古來の滿支交通上の大幹線である。尙此の幹線を新城にて北に外れ、會元堡を經て今の鐵嶺方面に出で、遼河を渡つて隋唐の遼東新城、一名通定鎭（新民縣の東北遼濱塔）に入り、それより營州に入る街道もあつた。所で此の大幹線は高句麗の直轄領土內を通過してゐたのであるから、靺鞨が此に由つて隋唐に朝貢し得るか否かは一に高句麗の態度如何に繫つてゐたわけである。所で高句麗は隋唐に抗衡對立し、その關係から靺鞨の對支入貢を喜ばず、此を遮斷する方針を採つてゐた。入貢を通じて靺鞨が支那の懷柔を受け、高句麗を離れて隋唐の味方となるを恐れた爲めである。されば右の大幹線に由る靺鞨の入貢は、高句麗の滅亡する迄、全く不可能であつた。第二の交通幹線は扶餘（農安）より西南行して西喇木倫を渡り契丹の住域を過ぎて朝陽に至る街道であつた。靺鞨の對支入貢は、高句麗の健在する限り、此の街道に由るの外なかつたわけである。但し扶餘方面は、或は突厥に入り、或は高句麗に隷屬したこと、已述の如くであるから、その高句麗に隷屬して居た時代

に於いては、此の街道に由る入貢も抑へられ、只突厥↓薛延陀に隷して居た時代に於いてのみ、此の兩國と支那との關係如何に由つてその通交の可能性が生れて居たものと見なければならぬ。古く北魏の延興五年、高句麗挾擊を策して入貢した勿吉の使臣乙力支が、その根據と推定せられる五常地方を出發し、嫩江を溯り洮兒河に出で、恐らく今の洮南附近に至り、それより南下して西喇木倫河を渡り營州に入る大迂廻路を取つて往復してゐるのは、當時、伊通河の流域に餘喘を保つて居た夫餘國が高句麗の屬國となり、高句麗と爭へる勿吉の通行を許さなかつた爲めである。[註47] 要するに靺鞨の對支入貢は農安より朝陽に入る街道によつてのみ可能であり、然も此の街道に由る入貢と雖も農安地方が高句麗の制壓より解放せられてゐる時代に限られて居たのである。尙扶餘（農安）方面からは伊通河・東遼河・遼河の諸流域に沿うて鐵嶺・遼陽方面に至り、それより遼西に入る通路があり、室韋は此の街道に由つて高句麗麗の遼東より鐵を輸入してゐたが、[註48] 此れ亦高句麗の爲めに抑へられ對支入貢に利用することは出來なかつた。

靺鞨の對支入貢路が專ら扶餘・營州街道に限られて居たとすれば、隋に入貢した靺鞨の所屬も或る程度推定することが出來る。想ふに、それは粟末部中の農安方面居住の者であつたと解す可きであらう。勿論、それのみであつたとは斷じ難いが、それが主體であつたと見て大過無い樣である。その第一理由は彼等が此の街道上の靺鞨側關口に住して居たことである。第二は突厥との關係である。此の街道は終始突厥の勢力內を走つて居り、從つてその往來には突厥の許可乃至保護を必要とする。所で扶餘地方の粟末靺鞨は突厥に稱臣してゐた。從つて此の貢路の利用も可能であつたわけである。扶餘地方以外の粟末靺鞨は高句麗に臣屬し、

突厥に對しては寧ろ抗立し、突厥軍の侵入に際しては高句麗に味方して邀擊奮戰したことさへあつた。かかる粟末靺鞨の突厥領内通過は容されなかつたであらう。第三は契丹との關係である。突厥領内を走る此の街道上に住む民族は霫と契丹とであつた。慓悍を以て鳴る彼等の間を安全に往來する爲めには彼等と相修睦して敵意を挾んで居ないこと、宗主國たる突厥の保護を受けること、此の二つが必要であるが、突厥に稱臣し、且つ契丹と修睦してゐたのは扶餘地方の粟末靺鞨で、他の粟末部人は高句麗に臣屬し、且つ高句麗の手先となつて契丹と常に相劫掠してゐたこと已述の如くであるから、唯一の貢路たる此の街道に由つて入貢してゐたのは扶餘地方の者と見る外無い。只此の入貢靺鞨の主體を扶餘地方の者と見る場合、隋と抗立してゐた突厥がその側背に在る靺鞨の入隋を容認し、自領内の長途往來を些かも妨げなかつたのは何故か、と云ふ點が問題として殘されて來る。然し此の疑問も高句麗との關係よりたやすく解決することが出來る。

扶餘地方の靺鞨は、已述の如く、高句麗に寇敵してゐた。即ち彼等は一方に於いて突厥に稱臣しつつ、他方に於いて高句麗と抗爭してゐたのである。伊通河地方の一局地に限られた彼等が東亜の大國高句麗に敢て寇敵したのは、蓋し突厥大帝國の支援を力と恃んでのことであらう。外力の大きな援助なくして蕞爾たる彼等が高句麗と抗爭を續け得たとは到底考へられない。同樣に、彼等が隋に入貢したのは、隋をして高句麗を西南より牽制せしめ、以てその對抗を有利に展開せんとしたのであらう。隋と對立せる突厥がその側背に住む靺鞨の入隋を放任し、自領内の通過を容して居たのは、彼等靺鞨の入隋の目的が隋をして高句麗に當らしめんとするに在り、從つて突厥には何らの害なきのみならず、萬一隋と高句麗と相戰へば寧ろ已に取つて有

利でさへあつたからであらう。又扶餘地方の靺鞨が契丹と相修睦してゐた一因も、共に高句麗を敵とする立場に於いて相通ずるものがあつたからであらう。

入隋靺鞨の主體とその入貢徑路は以上の論考によつて略々明かになり、又入貢目的の一部をも窺知するを得た。因つて次に此の入貢が開皇十三年を最後として杜絶へたこと、及び開皇五年乃至十年の六年間に中斷してゐること等の理由に就いて考説する。

右の中絶及び斷絶に就いて先づ考へられるのは、貢道を管して居た突厥、若しくは途上の悍族契丹が此を遮斷したのではないかとの推想であるが、此の場合、此の推想は全く許されない。それは此の貢道を制壓してゐた突厥は、開皇三年、隋に破られ、爾後隋は突厥を抑へてその威力を益々北方民族に浸透せしめ、貢道の閉塞を許さざるのみか、却つて此れが啓開を徹底せしめ、他の弱小民族の入貢一入多きを加へてゐるからである。扶餘地方の靺鞨の入貢中斷及び斷絶は突厥や契丹等の中間勢力の妨碍ではなく、他の勢力との關係から説明せらる可きである。他の勢力とは、此の場合、高句麗を措いて外にない。即ち扶餘の靺鞨の入貢中絶及び斷絶は高句麗の妨碍に由るもの、換言すれば彼等は此の時高句麗に制壓せられた爲め中斷若しくは斷絶せざるを得なくなつたものと解しなければならぬ。但し此の解釋を立證する爲めには、前以て、隋と高句麗との國際關係を概觀しておかなければならぬ。

高句麗は隋に對して抗拒的態度をとりつつ、然も一方に於いて盛に遣使入貢した。高句麗の遣使入隋を諸書より蒐集表示すれば上掲の如くで、その頻貢は一目瞭然する。一見抗拒態度に背反するかに見へる此の入

貢も、その目的を檢討するに、(イ) 隋の政情、特に對高句麗方針に對する偵察 (ロ) 中國文化の輸入による自國民度の昂揚 (ハ) 交易致富 (ニ) 抗拒を最後の衝突に至らしめざる外交處置、等がその主なるものであつたと解せられ、結局は抗拒的態度を持續し對抗力を强化せんが爲めのものであつた。然し上表を通觀するに、此の遣使朝貢にも頻疎廢續の著しい推移が認められる。尤も、此の表も亦靺鞨の入貢表と同樣、高句麗

隋代高句麗入貢表

年號	西曆	月日	記事	備考
開皇元年	五八一	一二月壬寅	高麗王高陽遣使朝貢	
二年	五八二	正月辛未	高麗百濟遣使貢方物	
仝	仝	一一月景午	高麗遣使獻方物	
三年	五八三	正月癸亥	高麗遣使來朝	
仝	仝	四月辛未	高麗遣使來朝	三年隋伐突厥、突厥東西分裂
仝	仝	五月甲辰	高麗遣使來朝	
四年	五八四	正月一	高麗遣使朝貢	三國史記ニノミ見ユ
仝	仝	四年丁未	宴高麗使者於大興殿	
一一年	五九一	正月辛丑	高麗遣使朝貢	
仝	仝	五月甲子	高麗遣使貢方物	一〇年七月辛亥高麗王陽卒
一七年	五九七	五月己巳	高麗遣使貢方物	

年號	西暦	月日	記事	備記
一八年	五九八	二月一	高麗王元、帥靺鞨寇遼西	此年隋征高句麗、失敗
二〇年	五六〇	正月辛酉	高麗遣使貢方物	
大業一〇年	六一四	七月	高麗遣使請降	七年以來大征高句麗、並失敗
備考	隋書本紀及ビ高句麗傳、册府元龜、資治通鑑、三國史記等ニ據ル			

の全入貢を悉したものとは斷言出來ないが、大勢考察の基礎となすに足るものと信ずる。先づ此の表を通觀して氣附かれるのは、扶餘の靺鞨の貢獻修慶と略々歩調を同じくしてゐることである。即ち靺鞨が入貢を中斷した開皇五年乃至十年は高句麗も此を中斷して居り、靺鞨が開皇十三年を以て入貢を止絶してゐるに對し高句麗もそれより二年早い十一年を以て止絶してゐる。尤も高句麗は開皇十七年と二十年とに入貢してゐるが、此は十八年の交戰の前後交渉と云ふ特別のものである。又大業十年には高句麗も靺鞨も入貢してゐる。かく歩調は共にしてゐるが、その中斷止絶の事情は全く異る。即ち靺鞨は他から制壓せられて止むなく絶つたものであり、高句麗は他からの制壓でなく專ら自己の意志に基ゐたものである。高句麗の入貢を制壓妨碍する勢力は無かつたのである。かうした同歩調と事由の相違とは爾後の考察の大きな基礎をなすもので、特に留意しておかなければならぬ。

さて高句麗の入貢は、表に現れて居る限り、決して少いとは云へない。さうしてかかる頻繁とも云ふ可き

入貢は、一見高句麗が親隋政策をとつてゐたかの觀を與へるが、事實は決してさうでなく、抗拒政策の表面を糊塗する駈引であつたこと、已述の如くである。所で開皇五年乃至十年の六年間は此の駈引の入貢さへも中絶してゐるのであるから、そこには當然高句麗の特別な動きがあつたものと見なければならぬ。

隋書卷八高麗傳に

開皇初頻有使入朝。及平陳之後。湯大懼治兵積穀。爲拒守之策。

とあつて、高句麗が隋初頻りに入貢したこと、隋の平陳統一後その來征を恐れて治兵積穀拒守之策を爲めたこと等を傳へてゐる。高句麗が隋の統一と共にその來征を懼れなければならなかつたのは、豫てより南朝に通じ隋を牽制せしめてゐたからであり、懼れ乍らも來らば來れの備へを固めたのは國力に自信を有つてゐたからである。要するに高句麗は隋初しきりに入貢し、隋の平陳後拒守に變つたと云ふのである。先掲朝貢表に示される開皇元年より四年に至る四年間の七回に及ぶ入貢は隋書の傳に云ふ「開皇初頻有使入朝」の具體的內容に外ならぬと共に、五年乃至十年の六年間の中絶は正に高句麗が拒守之策を爲めつつあつた時期と解せられる。但し隋が伐陳の詔を出したのは八年、遂に此を討滅したのは翌九年正月であるから、五年からの朝貢止絶は「平陳後」でなく些か過早の樣であるが、實は五年の頃より已に隋の統一成功が見越され、よつて此の頃より拒守之策を爲したのであらう。「平陳後」の表現は不完全と見る可きである。然し五年に着手した拒守之策は勿論平陳後愈々進められたであらう。尤も表に依れば九年の平陳後間もない十一年正月と五月とには朝貢して居り、十一年正月の賀正の入貢使は恐らく前年已に入隋してゐた筈であるから、實は九年

に平陳統一あるや、翌十年末に遣使し、更に十一年にも入貢したこととなる。かかる入貢は高句麗が隋の平陳直後、一時此に慴伏したかの推測を抱かせるが、事實はさうでなかつた樣である。隋書卷二高祖紀・開皇十年七月辛亥の條に

高麗遼東郡公高陽卒。

とある如く、平原王高陽卒し、嬰陽王高元が嗣立したのが開皇十年七月であるから、十年末及び十一年の入貢は此の國王交迭に乘じて或は隋の來侵せんことを慮り、此を防止せんとしたのがその最大の原因に相違なく、さればこそ新王の統治態勢が確立したと思はれる十二年以後に於いて再び朝貢を絶つたものと解せられる。即ち十年と十一年との遣使朝貢は心服の意志表示ではなく、新王の下に於ける拒守態勢の整備完成迄の駈引に外ならなかつたのである。從つて拒守之策を固め上げたのは高元で高陽のみの仕事では無い。高句麗傳の「高湯爲拒守之策」も亦不完全なる傳である。更に高句麗傳には右に續いて開皇十七年湯卒すとあり、その他の史書、例へば資治通鑑の如きすら陽の死を開皇十七年に繫けてゐるが、[註49]此は大きな誤傳である。

開皇五年より拒守之策を固めたと云ふ高句麗は何を爲したか。治兵積穀はその一である。然しかかる內面の固めと共に、對外工作も併せ行ひ、特に隋と戰ふ場合、當然背後の脅威となる可き寇敵關係の靺鞨を制壓し、以て兩面受敵の不利を除かんとした形迹がある。

冊府元龜卷九九六外臣部・責讓門・開皇十七年の條に隋の文帝より高句麗王湯に送つたと云ふ責讓の詔文を載せ、その一節に

上略。而乃驅迫靺鞨。固禁契丹。

なる一條を傳へてゐる。さうして上掲記事の續きを讀むに、高句麗王の湯は開皇十七年、此の詔を受けて恐惶し、遣使陳謝せんとしたが、會々病卒して果さなかつたと云ふ。此の責讓の一件は資治通鑑卷一八七・隋書卷八一高句麗傳等にも同年の條に繫けてあつて、諸史皆繫年に食違ひがないから、事實此の年、湯宛ての責讓文が發送せられたものと解して差支へない樣に思はれもするが、穉つて高句麗側の歷史を見るに、十七年當時の王は高元で、高湯ではない。そして高元は已に開皇十年以來在位し、然も十八年二月には靺鞨を率ゐて隋領たる遼西に挑戰的侵入を敢行し、此が因で隋・高句麗間の正面衝突となつたことは已述の如くである。されは此の挑戰的侵寇の前年たる十七年の頃、假に高句麗王が隋より責讓文を受け取つたとしても、決して恐惶狼狽する筈はなかつたと考へられる。此の責讓文の發送を十七年とするのは必ず誤りで、恐らく翌十八年に起つた兩國の第一回衝突と此の責讓との間に關係ありと見た後世史家の勝手な繫年であらう。而して支那の史書に云ふ所の湯とは恐らく陽のことであらう。陽は、已述の如く、開皇十年七月に卒し、その後を元が嗣いでゐるのである。然らば湯宛ての責讓文と云ふのは、實は此の陽宛てのもので、從つて十七年と云ふのも實はおそくとも十年七月以前でなければならぬ。十七年の七はどうしても衍字と見る可きである。さうして此の責讓文發送の年を開皇十年と見れば、前後との關係が總て合理的に解せられるのである。即ち先表を見るに、開皇元年より四年迄續いた高句麗の入貢が、五年より十年の初め迄絶えてゐるのであるから、此に對して文帝が責讓の文を送つたこととなり、先づ責讓文發送の事情が合理的に解せられる。又此の文を受取つ

た湯は恐惶して遣使陳謝せしめんとしたが會々病歿したとあるのも、十年七月の陽の死と正に一致して、此れ亦合理的に解せられる。さうして新に嗣立した元が、前王の遺策を繼いで入貢し、責讓に對して陳辯すると共に、王位交迭に乘ずる隋の來征を未然に防がんとしたものと見れば、開皇十年末及び十一年の入貢も極めて合理的に說明出來る。要するに責讓文の發送は開皇十年七月以前であり、それは開皇五年以來の缺貢、換言すれば治兵積穀拒守之策を爲せるを責めたものである。所で此の責讓文中に「驅迫靺鞨。固禁契丹」の一句があるのは、高句麗が隋に對する拒守策の一として靺鞨及び契丹の經略を行つたことを示すものでなければならぬ。契丹のことはしばらく措く。此所で特に究明しなければならぬのは靺鞨に對する經略である。

隋に對する拒守策としての高句麗の靺鞨經略は當然先づ隋に應ず可き危險性を有つ靺鞨に向つて行はれた筈である。隋に應ず可き恐れある靺鞨と云へば、それは豫て隋に入貢しつつあつた者である。即ち高句麗は拒守之策の一として豫て隋に入貢しつつあつた靺鞨に制壓を加へたものと解せられるのである。高句麗が隋への入貢を絕つた事、即ち拒守態勢を一應整へて抗拒態度を表面に表した年なる開皇五年には靺鞨の入隋も絕へてゐるのは、高句麗の靺鞨經略が此の年略々終了成功したことを物語るものに外ならず、從つてその經略着手はそれ以前であつたと解せられる。而して此の入貢靺鞨の主體は、已述の如く、扶餘を中心とする伊通河流域の者であつたのであるから、高句麗が驅迫したと云ふのも亦彼等であつたこととなる。而して高句麗の伊通河流域征服が開皇四五年の頃に行はれたことは、此を當時の國際情勢より判斷するに、誠に機を得

た勢力擴張であつたと云ふことが出來る。

扶餘方面の靺鞨は粟末部中で高句麗に寇敵せる張本であつたが、その寇敵には西方の突厥の大勢力を背景とし、又隋に入貢して此とも結んで居た。從つて高句麗としては、突厥の健在なる限り、此の扶餘地方に對して手を下し難かつたわけである。所が此の突厥は開皇三年に隋に破られ、東西分裂の大動搖を來した。此は扶餘方面經略に取つて好都合となつた筈である。又此の突厥を破つた隋は力を南方に向け、七年に後梁を亡し、九年に陳を倒し、以て天下を一統した。即ち開皇五年頃は突厥の勢力頗る動搖し、隋亦その力を南方に集中してゐた時で、突厥に稱臣し、隋に入貢せる扶餘の靺鞨を伐つには正に絶好の機であり、高句麗は此の好機をよく捉へて斷然此を征服したのである。尙此の征服の地が伊通河流域であつたことは後文に更に他の史料から論證する。

開皇九年、南朝討滅を了へた隋の文帝が眼を再び北方に向けた時、已に高句麗は親隋派の靺鞨を經略し、その入隋を抑へてゐた。そこで直ちに此を責讓したのが先揭の「驅迫靺鞨。云云」の詔文であつたわけである。そして此の詔文を受けた時、會々高句麗では國王死去の大問題に遭遇した。そこで新王の地位確立迄の糊塗策として同年及び翌年に使臣を入隋せしめ陳謝せしむると共に、扶餘の靺鞨の入隋をもしばらく容認したので、十一年乃至十三年の靺鞨再入貢があつたものと解せられる。そして十三年を最後として靺鞨の入貢が止絶して終つたのは、即位後三年を經て愈々拒守態勢に自信を得た新王高元が再び彼等の入隋を抑へて終つたからであらう。此の止絶より四年後の十七年、高元は隋に挑戰的侵寇を敢てしてゐるのである。尙煬帝

の大業十一年の入貢は帝が八年より十年にかけて高句麗を征したその影響であらう。此の征伐は隋の失敗に終つたのであるから、靺鞨の入貢がその後ち續かなかつたのは當然である。

隋朝に入貢した靺鞨が悉く扶餘地方の者であつたと斷定し得る史據はない。然し殆んどすべてが此の地方の者であつたと見て初めてその入貢の斷續止絕の事情を說明し得ること上述の如くであるから、やはりかく斷定して大過無きものと云へよう。そこで粟末靺鞨と隋との關係に對する上來の論究を要約して條書すれば、左の如くなる。

(イ) 入貢せる靺鞨は粟末部中の扶餘地方の者、即ち高句麗に對立寇敵してゐた勢力であること

(ロ) 入貢の目的は隋の力を援いて高句麗との對立を有利化せんとするに在り、同樣に突厥にも稱臣し此を背景としてゐたこと

(ハ) 高句麗は突厥・隋・南朝間の爭覇の隙を利用して開皇四五年の頃遂に此の地方の靺鞨を制壓し、五年より十年迄その入貢を阻んだこと

(ニ) 隋の一統は開皇九年に成就し、因つて翌十年、扶餘よりする靺鞨の入貢再開を高句麗に强要し、高句麗は一時止むなく此に應じ十一年以後その入貢を許したが、對隋拒守態勢成るや、十三年を最後として永久に靺鞨の入貢を遮斷したこと

(ホ) 扶餘地方の靺鞨と高句麗との寇敵關係は開皇四五年頃を以て臣服關係に轉じ全粟末部人の高句麗に對する臣服協力が成つたこと

即ち粟末靺鞨は未だ東亞の一弱小勢力として、その對外關係は隋・突厥・高句麗三大强國の勢力關係により左右せられて居たことを知る。尙突厥・隋・高句麗の間に處する扶餘地方の靺鞨に就いては考察す可き餘地が頗る多く、次項に述べる突地稽一黨のこともその一例であるが、敍述の便宜上後文に逐次扱ふこととする。

以上考說した所は朝貢の斷續を通じて觀た粟末靺鞨、特に扶餘の靺鞨と隋との政治的關係である。此の外に尙彼我の交易關係があつた。以下此の交易に就いて些か考說しておく。

隋代（他の時代に就いても同樣の場合が多かつたが）を通じてその東北經營の據點となつたのは營州である。此れ迄に言及した所の奚・契丹・靈・室韋・高句麗・靺鞨等は勿論、塞外の覇者突厥→薛延陀等の諸勢力に至る迄、その控制はすべて此の營州を唯一又は一大據點として居た。されば此所を扇の要として此等諸勢力に往來する大道が通じ、彼等所謂東北諸夷は悉く此の大道に由つて營州に輻湊し、此所を關口として支那と政治的・經濟的・文化的交涉をなしてゐた。かかる重要性に鑑み、營州の長官には特に華夷の統御に長じた大物が据えられてゐた。そして此の長官は常に諸夷統御の手段として此の地に於ける華夷貿易を利用してゐた。即ち支那の文化品に對する彼等諸夷の執着憧憬を利用し、恭順服屬の徒に對しては交易上に種々の便益を與へ、傲慢抗拒の輩に對しては交易を制限禁遏し、經濟的・文化的側面より彼等の懷柔を强化せしめてゐた。又支那は防牒の關係から濫りに華夷の互市するを嫌ひ、一定地に互市場を制限する方針を採つてゐたので、營州の互市はその地理的好條件以外にかうした政策からも夷商の集中する所となり、その交易は頗

る繁榮して居た。單に華夷間の貿易のみならず、諸夷輻湊した結果としてそれ等夷狄間の交易場ともなつて居た。但し此所に營州の貿易を詳說するのは目的でないので、只その盛況を示す若干の史料を擧示するに止める。華夷貿易史上より見たる營州は別に專攷す可き重要問題である。

先づ隋書卷四九韋藝傳に

遷營州總管。藝容貌瓌偉。每夷參謁。必整儀衛盛服以見之。獨座滿一榻。番人畏懼。莫敢仰視。而大治產業。與北夷貿易。家資鉅萬。頗爲淸論所譏。開皇十五年卒。

とあるは營州に於ける華夷貿易の盛況をよく表した記事であり、資治通鑑卷一八〇隋紀・大業元年八月の條に

契丹寇營州。詔通事謁者韋雲起。護突厥兵討之。啓民可汗發騎二萬受其處分。中略。契丹本事突厥。情無猜忌。雲起既入其境。使突厥詐云。向柳城與高麗交易。敢漏泄事實者斬。契丹不爲備。

とあるは突厥・高句麗人が營州（柳城）に來つて華人と交易すると共に、突厥人と高句麗人との間でも交易して居たことを示すものである。大業元年當時、高句麗は隋に抗衡して入貢さへも絕つてゐた。然るに營州に於ける貿易を容されてゐたのは、假令國家間の關係が圓滑でなくとも寇掠挑戰等の暴擧に出でざる限り營州の出先當局としてはその貿易を敢て嚴禁しなかつたからで、それは彼等の執着熱求する中國品との交易を全禁することが却つて彼等を寇掠に驅立て、邊境保衛に惡結果を齎うす場合の多いことを考慮した爲めであつた。勿論、入貢親善の夷狄は、さうした抗衡者よりも大なる保護便益を受けてゐた。然し絕貢の者と雖も交易をなし得てゐたことは注意す可きである。尙朝貢そのものが此に對する支那よりの回賜を豫想し、又事

實必ず回賜を受けて居た所の貿易の一形態に外ならなかつたことは、常に筆者の論じ來つた所である。[註50]

さて營州に於ける靺鞨の對支貿易に就いて考ふるに、特に扶餘の靺鞨が最も保護便益を受け、往來取引の盛況を致してゐたことは、彼等が修好入貢を續けてゐた一事に徵して明かであらう。又その修貢の絕えた開皇十四年以後と雖も時に營州に來つて貿易する者があつたと考へて誤りあるまい。隋書・靺鞨傳に隋に歸化せる靺鞨人度地稽のことを記して

居之柳城。與邊人往來。

とあるが、度地稽は後文に論證する如く扶餘地方の大酋長であるから、此の邊人との往來は主として鄉土たる扶餘の靺鞨との往來と解せられ、從つて此の記事から、先揭朝貢記事以外の往來貿易のあつたことを窺知することが出來る。然し營州で交易したのは高句麗に寇敵せる時代の扶餘地方の靺鞨のみではない。隋書卷三九陰壽傳に

時有高寶寧者。齊氏之疎屬也。爲人桀黠有籌算。在齊久鎭黃龍營州。及齊滅。周武帝拜營州刺史。甚得華夷之心。高祖爲永相。遂連結契丹・靺鞨兵反。中略。開皇初又引突厥攻圍北平。

とあつて北齊→北周→隋初にかけて營州の長官たりし高寶寧なる者が靺鞨兵を援いて反したことが見えるが、此の靺鞨を以て扶餘地方の者と解するは些か穩當を缺く樣に思はれる。遙々扶餘地方より營・契丹の地を通り拔けて援兵を繰出したとは見難いからである。寧ろ此は高句麗の遼東內に在つた粟末靺鞨と解す可きであらう。遼陽方面からの出兵ならば無理な感は全くない。而して彼等が高寶寧に味方したのは、高句麗が

北朝牽制の意味から裏面より此の叛亂を後援したことにも因らうが、又彼等が常々營州に來つて貿易し、その懐柔を受けてゐたことにも因るものと解す可きであらう。

開皇十八年二月、高句麗軍が靺鞨兵と共に遼西に侵入し、營州總管韋沖に擊たれ却つて敗走したことは先に述べたが、此の韋沖に就いて隋書卷四七同人傳に

尋拜營州總管。兄韋藝亦爲營州總管。開皇十五年。卒官。沖容貌都雅寛厚。得衆心。懐撫靺鞨・契丹。皆能致其死力。奚・霫畏懼。朝貢相續。高麗嘗入寇即開皇十八年二月高句麗王元、帥靺鞨入寇、沖率兵擊走之。

とあり、彼は開皇十五年、亡兄の跡を嗣いで營州總管となり、よく契丹・靺鞨を懐撫したと云ふ。當時營州の近傍には隋初以來歸化せる度（突）地稽等一團の靺鞨人が住んで居たから、懐撫せる靺鞨中に彼等が含まれてゐたことは紛れないが、只それ丈であつたと見るのは些か物足りない感がある。やはり高句麗の遼東方面より貿易に往來せる者をも含んでゐたと見るのが穩當ではあるまいか。當時高句麗は隋と對立してゐたが、高句麗人さへも營州に出入して貿易して居たこと已述の如くであるから、高句麗管下の靺鞨人が營州に往來してゐたと解しても何ら差支へない。而して彼の亡兄韋藝は開皇十五年迄營州總管の任に在り、先に記事を引いて説明した「大治產業。與北夷貿易。家資鉅萬」と傳へられてゐる男である。此の韋藝が貿易して儲けた北夷の中には必ずや高句麗人・靺鞨人も含まれて居たであらう。

次に隋書卷六五李景傳に、彼が煬帝被弑の後ち、賊軍蜂起の中に在つて克く幽州を孤守したこと、幽州城の守り漸く危殆に瀕したこと等を述べた後ち

遼西太守鄧嵩率兵救之。遂歸柳城營州。後將還幽州。在道遇賊見害。契丹・靺鞨素感其恩。聞之莫不流涕。

とある靺鞨もやはり營州在住の者を指してゐること勿論であるが、同時に營州に來つて交易せる遼東の者をも指してゐるのではないかと想はれる。

上述の如く、粟末靺鞨は、隋に入貢修睦せる者は勿論のこと、修睦せずして却つて對立せる者さへ、時折營州に來つて貿易してゐたと考へられるのであるが、同時に彼等は已述の如く高句麗に從つて營州管内に侵寇し、又隋書〇卷七裴仁基傳に

擊吐谷渾於張掖破之。加授金紫光錄大夫。斬獲寇掠靺鞨。拜左光祿大夫。從征高麗。進位光祿大夫。

とあるに依つて知られる如く單獨にも入寇してゐた。尙此の寇掠の年は明かにし難いが、煬帝即位以後、高句麗征伐（大業七年着手）以前である。而して此の單獨の寇掠もその裏面には高句麗の使嗾援助があつたのであらう。煬帝が高句麗征伐を決意したのは高句麗が東突厥と結んで對隋陣を强化せんとした策謀が明かとなつたからで、そのことは隋書卷八四東突厥傳に煬帝が可汗啓民の衙庭に親幸した時のことを述べて

先是。高麗私通使啓民所。啓民推誠奉國隋國。不敢隱境外之交。是日將高麗使人見。勅令牛弘宣旨謂之曰。朕以啓民誠心奉國＝故親至其所。明年當往涿郡。爾還日語高麗王知。宜早來朝。勿自疑懼。存育之禮當同於啓民。如或不朝。必將啓民巡行彼土。使人甚懼。

とあるに依つて知られる。但し煬帝が啓民の衙庭で突厥に入使せる高句麗の使臣に會つた際は只高句麗王の入朝を促し、萬一入朝せざれば征伐す可しと宣したに止まつたのであつて、尙交涉の餘地を殘してゐたわけ

である。此の催促に對し、從前より拒守態度を堅持してゐた高句麗王が俄に應諾する筈はなかつた。先述の靺鞨をして隋領を侵略せしめた一件は、此の入朝督促に對する高句麗王の否定の意志表示であつたに相違あるまい。かくて煬帝の激怒となり、隋朝倒壞の致命傷となつた歴史的大遠征が決意せられたものと解せられる。

以上を要するに、東北諸夷と隋との互市の中心となつた營州當局が、たとへ隋朝に稱臣入貢せざる者と雖も、直接邊境に入寇し挑戰をなさざる限り互市に參加するを妨げない方針をとつてゐた爲め、高句麗人やその配下の粟末靺鞨さへも此所に出入して交易してゐた。然も彼等は時に入寇した。即ち或は交易し、或は寇略して居たのである。然し稱臣入貢し、常に修睦方針を採つて居た者が貿易に於いて一段の保護便益を與へられてゐたことは勿論である。扶餘地方の靺鞨が隋初以來入貢を續けてゐるのは、高句麗との寇敵關係を隋との提携によつて有利化せんとする政治的目的以外に、修睦によつて貿易上の便益を受けんとする經濟的目的をも有してゐたと見る可きであらう。

粟末靺鞨の隋に對する稱臣入貢が政治目的以外に貿易目的を有つてゐたことは以上によつて略々認められるが、同じことは彼等の突厥或は薛延陀に對する稱臣入貢に就いてもあてはまるものと見て誤りあるまい。突厥・薛延陀は自らの記錄を殘してゐない爲め此を證する史傳を缺いでゐるが、やはり靺鞨の入貢には貿易的目的が含まれて居たことは疑ひあるまい。

靺鞨の入貢は隋に入つて初まつたのでは無く、それ以前からの繼續であつた。靺鞨の最初の入貢は北齊の

河清二年（五六三）で、それより北朝末迄二十年近くの間に約十回近く入貢して居る。そしてそれが隋初にも引續いて先表の如き入貢となつてゐるのである。所で隋に入貢した靺鞨は扶餘地方の粟末靺鞨であり、その入貢は突厥が扶餘地方を制壓して居た期間を通じて繼續し、突厥の制壓力喪失と共に止絶してゐる。そこで此の關係を北朝に溯らせて考へると、河清二年以來入貢した靺鞨も扶餘地方の者であり、突厥の勢力の此の地方への波及によつて入貢が開始せられたものとの推測が生れて來る。然し隋以前の靺鞨の入貢に就いては、先に「勿吉考」[註四]に於いて論及しており、更に後章に於いても「靺鞨七部成立の由來」と題して詳考する心組みであるから、此所には右の推測以上の説明は一切省略する。

扶餘地方の粟末靺鞨が突厥の勃興と共に此に附して高句麗に寇敵し、遙々支那に迄朝貢を續けたことは、輝發河・北流松花江兩流域の同じ粟末靺鞨が終始高句麗に臣屬し忠實に順服協力してゐるのと全く異つた行き方として頗る吾人の關心を惹く。勿論、此れにはその地理的關係、即ち一は突厥に近く、他は高句麗に近いと云ふ關係も一應考慮せられるが、ただ此の地理的環境のみを以て説明し去る可きものか否か、大いに考究の餘地がある。然しその考究も亦後章に扱うこととする。